

比較宗教學目次

宗教思想の起原及び宗教學の起原

宗教の解釋

宗教の分類

第一講 埃及の宗教

第二講 巴比倫の宗教

第三講 亞西里亞の宗教

第四講 婆羅門教印度教

第五講 比耳士亞教

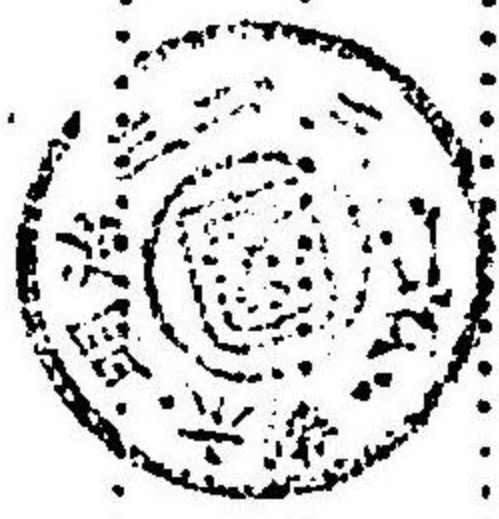
第六講 希臘古教

第七講 羅馬古教

第八講 猶太教

第九講 亞米利加古教

第十講 歐洲古代宗教



一

八

三三

三九

四九

五七

六九

八五

九四

一〇五

一〇七

一一二

一二二

第十一講 獨逸古代教……………一二三

第十二講 マホメト教……………一二九

比較宗教學目次終

比較宗教學

文學博士 井上圓了講述

境野哲筆記



宗教思想の起原及び宗教學の起原

今比較宗教學を講ぜんとするには先づ宗教其の物を説明するの必要を感ず即ち吾人は何故に宗教を信するか又何故に信ぜざるべからざるか或は何故に吾人は其の感覺或は道理にて知り得べからざるものを信ずることを得るか此等の問題は吾人の第一に講究を要する所なりと雖も之を知らんと欲せば宜しく宗教の人類の上に起りし原因を明らかにせざるべからず即ち以上の諸問題は畢竟如何にして宗教が吾人々間の上に出で來りしかといふ事に歸着するなり此の事たる極めて興味深き事項にて學者の講究を怠るべからざるものなり或は宗教の起原を論じて曰く人間は有限にして且つ依立的のものなり其の一旦顧みて自己の有

第十一講 獨逸古代教

一一三

第十二講 マホメト教

一二九

比較宗教學目次終

比較宗教學

文學博士 井上圓了講述

境野哲筆記

宗教思想の起原及び宗教學の起原

今比較宗教學を講ぜんとするには先づ宗教其の物を説明するの必要を感ず即ち吾人は何故に宗教を信するか又何故に信ぜざるべからざるか或は何故に吾人は其の感覺或は道理にて知り得べからざるものを信ずることを得るか此等の問題は吾人の第一に講究を要する所なりと雖も之を知らんと欲せば宜しく宗教の人類の上に起りし原因を明らかにせざるべからず即ち以上の諸問題は畢竟如何にして宗教か吾人々間の上に出で來りしかといふ一事に歸着するなり此の事たる極めて快味深き事項にて學者の講究を忽諸にすべからざるものなり或は宗教の起原を論して曰く人間は有限にして且つ依立的のものなり其の一旦顧みて自己の有

限を知り依立的動物たるを覺るときは必ずや無限獨立の軀を認め之に憑りて以て自ら安んぜんとするの念を生ずるに至る是れ宗教信仰の起原なりと既にデカ
 ートの如きは吾人か自ら其の有限且つ依立のものなることを覺知すると同時に神
 の存在は明瞭にして疑ふべからざるものなることを説けり然るに無神論者又は
 經驗派唯物學者の説くところを聞くに曰く宗教は吾人の慾望を満足する所のも
 のにして幸福快樂健康一切の慾望は今日吾人の生涯中に於て到底之を充たすこ
 と能はざるか故に終に未來世界若しく神等の想像を起して由て以て其の安心満
 足を得んとするに至るものなりと彼の經驗哲學者スベンサー氏は恐怖心より宗
 教崇拜の由て起ることを論せり然れども宗教心は決してかゝる進化論者の主張
 するか如きものにはあらず恐怖心利己心は宗教心を誘起するの原因とはならん
 さりながら直ちに之を以て宗教心其者なりとはいふべからず實に宗教心なるも
 のは吾人の心内に生れなからにして有するものといはざるを得ざるなり此の理
 は後に至りて別に説明すべし
 又宗教といふことにつきても之を解するに於て外形の上に現はれたる所を宗教

といふあり或は内部の精神上につきて宗教の名を命ずることあり例へば偶像を
 安置して祭祀を行ひ讀經禮拜するを以て宗教とすると又此の如きは唯宗教の外
 形に過ぎずして宗教其の物は吾人の心内にありといふの二あるべし且つ外形の
 方よりいふときは開祖を以て直ちに神の如く思惟し其の言は一語半句總て之を
 神聖なるものとし經典中に載する所は全然其の章句の儘を確信して經典即ち宗
 教なりと信ぜりされど少しく智識學問を有するものは恐くはかゝる考を抱ける
 ものなかるべし耶蘇教中にありても舊教と稱するものは即ち其の外形を尊ぶも
 のにして新教は無形的にして精神を本とするものなり譬へば舊教徒は神前に供
 せしパンと葡萄酒とを以て神の血神の肉なりと信し其の小片を食ひ其の一滴を
 飲みて以て自ら神聖なるを得たりと思考す新教は之に反して其の最も過激なる
 もの所謂クエーカー宗の如きに至りては全くかゝる儀式を廢却して秋毫も取る所
 なし以て其の別を見るべきなり
 次に宗教と道德との關係につきては或は宗教と道德とを區別して其の範圍を
 異にするものあり或は宗教と道德とは全く其の範圍を同うすと主張するものあ

り學者中に於ても議論自ら同じからずカント、フイヒテの如きは共に宗教を道德の範圍内に置きしと雖も今日の學者は全く之を分離して論すること其の常なり以上宗教に關し信仰につき之に連係する所の諸問題につき人々の解する所各同一ならずと雖も兎に角其の宗教の人類社會に起りしことは極めて古くして苟くも茲に人あり心あり思想智識の幾分を有する以上は必ず此の宗教の存在するあるを見る近來比較言語學の進歩と共に宗教なるものは耶蘇馬哈麥等の諸大聖か其の智識より新たに發見せられたるものゝ如く思へりしことの誤謬を知り宗教の人類の生ずると同時に既に人類の上に取りしことの見出さるゝに及べり今各國の最も古き記録は必ず宗教的の書なることを見るも以て之を證すべし希臘の鬼神論印度の韋陀我國の神代史皆此の類なり或は未だ書冊をなさず僅かに一句二句の詩片のたぐひの今日存する者を見又は一切の古代の紀念とすべきものを察するに總てこれ宗教的のものにあらずといふことなし其の言語の性質を究むるに及ては一層其の然る所以を證明することを得べし故にヘルデル氏は曰く總て高等の智識學問は文章及び言語にて傳はれる宗教説より發達し來れりと今試

みに一例を示して言語學上文章の未だ現はれざる以前に遡りて當時なほ宗教思想の存在し居たりしことを證せんは彼の印度人は現今の歐洲人と其本原を同うする同一アリアン人種に屬することは人の知る所なるか其の後分れて一は印度人となり他は希臘人等歐洲の各人種となりしが斯く既に相分離して後に至りては何れも皆宗教を有せざるものなきことは書籍上歴史によりて之を知ることを得べしと雖も未だ其の分れざる以前同一アリアン人として生息したりし當時既に宗教思想を有し居たりしことは印度の梵語と希臘羅典等歐米諸國の語とを比較して之を明むることを得べし例へば神なる語の如きは印度にてはデウルといひて(Di)光と譯す形容詞にすれば(Diva)輝くと譯すとなる韋陀經等の中に出でたるものによりて考ふるに此の語は「光」といふに止まらずしてなほ神なる意味を有するものゝ如し否な寧ろ神と解せざるべからざること多し然るに羅典語にては神をデウス(Deus)といふこれ其の梵語と起原を同うする語なること明にして以てアリアン人種の未だ分離せざりし時より神なる思想を有し居たりしことを見るに足らん之に關して或は人智の未だ發達せざる太古の人には

各個の物体に對する思想の外決して神といふか如き抽象的の考あるものにあらずと主張するものあれども余は獨り神のみならず宗教全體の上より見るも宗教的思想なるものは人間固有の性質にして如何なる人類と雖も之を缺けるものあるべからずとなすものなり

然れども學問上より神とは如何なるものなるか或は果してこれ信すべきものなるか或は神は吾人の信する所の神の外にありて吾人の信する所は眞神にあらずるなきを得んや等の事に論及したりしは極めて後代のことにして希臘にありてターレスの哲學説をなしてより漸次に神の問題に解釋を與へ希臘人の信仰したる多神教に對して神は果して多數なるか神は空想に過ぎざるかを論ずるに至りしは實にこれ宗教學の初起なりとす近世哲學者フニエルベハは曰く宗教は人心固有の病症なり此の病症即ち宗教の根原なりと然るに此の如きは紀元前第十六世紀に於て既にヘラクリタスの論じ居たりし所なりき氏は曰く宗教は一種の病症なりと此の宗教に關する氏の説は宗教の事を以て哲學上の一問題として學者論議の題項としたる最初にして且つ氏は當時の世人が偶像を信仰禮拜するを見

て大に其の誤謬を痛論したりしものゝ如し其の後エピキユラス氏も亦世人の宗教に對する誤想を見て全く世人の思想中より宗教を除去し去らんと試みたり然れどもヘラクリタスはエピキユラスの如く全然神を否拒したるものにはあらずして唯世人の信する偶像的多神を排したるのみされど神の存在は氏自ら信する所ありしなりエピキユラスも神を以て全く存在せずとはいはずといへども神は唯人より一種高等なるものにして常に空中を飛翔し自ら神の社會をなして存在するものなれば毫も人間社會に關係あるものにはあらず然るに神を以て人間を左右するものとなし人を賞罰するの權あるものとなすか如きは徒らに人心を弱め死後を想ふて却て不安を生ぜしむるに足るのみ實に此の理あるにあらずと説けりそはしばらくおき兎に角宗教學の起因なるものは例へば小兒の幼少なるや目前の事物を其の儘感受して怪しむことなしと雖も漸く成長するに隨ひて一物々々につきて種々の疑を起すが如く初めは怪まずして信仰したりける宗教も人智の發達に伴ふて之に關する疑問を提出し來り終に宗教學となるに至りし所以なりタ
 ーレスが當時の宗教に反して世界は神の創造にあらず世界の實體は水なりと主

張し万有の中に於て其の原跡を見出さんと力めたりしは今日より見れば極めて笑ふべきが如しと雖も當時の状態より推すときは其の卓見實に及び易からざるものありとす太古の蠻人か木棲穴居の當時に於て火を發見して物を煮ることを知り鐵を山中より掘り出して切斷の用を辨するを覺るに至りし類は思ふに今日の蒸氣電氣の發明に比して其の効更に偉大なるものありターレスの哲學上に於ける亦此の如きにあらずとせんや

宗教の解釋

宗教即ち Religion の字義は未だ一定すること能はず其の元如何なる字より出たるものなるかは學者の間異説多くして明ならず且つ世人か宗教といふことにつきても信仰する心の方よりすると信仰する物體よりすると及び信仰する作用よりするとの別ありて一ならずるが如しと雖も今宗教の語原より考ふるに Religion なる語はもと羅典語の Religio より來りしものなりといふ羅典語の Religio の起りにつきては異説ありと雖も羅馬のシセローの説によれば Re-legere より來りしものなりといへり即ち英語にて To gather up again 又は To Consider & To ponder の義に

して沈思熟考する事の意なれば注意又は尊敬等の意味も之より出で來るものとす又一説に隨へば Religion は Re-ligare にして To fasten の義即ち緊着のことなりともいふ然れどもシセローの説寧ろ眞に近きが如し然らば心を集むるといふ意味よりして信仰のことろも出で來りし者なるべしさりながら字義の本原は如何にもあれ既に之を用ふることの長き字義も亦其の古昔の意味を變せずといふことなし然らば今日の宗教を解するに古昔の字義に遡るの要を見ずといへども今は唯參考として之を述べたるのみ

余は之より進みて世人は一般に如何なるものと呼んで宗教となす乎を探らん蓋し野蠻人中或は古代人の中につきて之を察するに宗教を有せざるものなきにあらず故に人或は宗教は人間一般に有する者にあらず或は全く之を有せざるものあり此くの如きは目して人間固有の性質といふべからずとなすされども余の考ふる所によるに此等の人種には宗教的の格段の形を有せざるは則ち然かなりと雖も必ずや宗教の種子原因となるべきものは之を有すること疑なし例へば野蠻人か頭を撫して己れか行爲の是非を思考し或は亡靈を恐るゝか如きは皆宗教的

比 較 宗 教 學

思想の本原たるべきものなり然るに此に一考し置かざるべからざることをありそ
 は宗教は必ず神を立てざるべからざるや否やといふことは是なり學者の之に對す
 る答となるべきもの亦未だ一定せず若しカントフヒテ等に従ふときは必ずしも
 神を立つると否とを問はず宗教の名を與ふるを難せざるもの、如しカントは宗
 教と道德とを同一視して吾人の道德上の義務を神の命令として考ふるときは則
 ち宗教となるものなりとせり故に宗教と道德とは畢竟同一物にして實に宗教は
 道德の一部といふに外ならず且つ宗教は必らず道德に關係して成立すべきもの
 にして宗教にして道德に關係なしといはんか此くの如きは極めて意味なきもの
 たるに過ぎずとなせり又フヒテは曰く宗教は實行的のものにあらざして唯一種
 の智識なり人の實行に關するものは道德の事にして宗教を俟つを要せず若し道
 徳を勤むるに必ず宗教を用ひざるべからざるに至らばそれは社會の極めて腐敗し
 たる徴を示すものにして實にこれ宗教の本領なるにはあらざ宗教は唯一種の智
 識にして之によりて我と我の本體とを知りて之を一致せしめ以て自己の安心を
 得るものなりとカントフヒテ二氏の如きは以上の説より考ふるに一は宗教は道

比 較 宗 教 學

徳なりといひ一は宗教は學問なりといひて特に別に格段なる宗教なるものを見
 ざるが如し前に述べたりしが如く耶蘇教徒中にも舊教者は皆神を信する外之
 を信する作法即ち偶像葡萄酒パン等の如きを以て總て意味あるものとし此等は
 皆宗教を組織する所以のものなりとなすと雖も新教徒は之を改革してかゝる外
 形の虚飾を去り道德の上に宗教を立てんと試みたり彼等の言によればかゝる外
 形の類ひは耶蘇生時の當代には固よりありしものにはあらずして後世より附加
 したるものなり故に其の之れなかりしは却て耶蘇の本意なりと然らば此等新教
 は其の名は新教と稱すといへども實は復古を稱へたるものといふへし今カント
 の宗教即道德なりと主張するか如きは實に此の説の更に極端に達したるものと
 見るを得ん故に氏は若し自己を利せんかために祈禱祭祀をなすが如きものなら
 ばこれ一の迷心にして宗教にはあらずといへり然るに此に一派の論者ありて宗
 教を解して以爲へらく宗教は決して道德或は學術と同一なるものにあらずして
 一種の特質を有するものなりと其の一人はシュライエルマーヘル是れなり又ヘー
 ゲルも他に異なる一種の説をなしたりシュライエルマーヘル氏は依憑心を以て宗

教を説きヘーゲル氏は自由を以て之を解せんとせり前者は曰く宗教とは吾人か
 或る物体の上に絶對的に依憑することより成立す故に絶對的依憑の意識是れ即
 ち宗教なりと然るに後者は曰へらく若し依憑心を以て宗教成立の根本となすを
 得ば人の如きは人類よりは寧ろ先づ宗教を有せざるべからざるものに屬す豈に
 此の理あらんや故に宗教の成立する所以は依憑といはんよりは却て自由の思想
 といふべきものなり所謂宗教は神的精神を有限的精神中より開發するより成る
 と畢竟するに二氏共に此の世界は互に相依りて成立する所のものにして何か絶
 對的の獨立のものありて吾人の心中には之に依憑する所の一種の感覺あり此の
 感覺即ち宗教の本原なりといふに歸するなり蓋し此の世界の各事物所謂有限の
 各類は此の有限を統括する所の無限物に依憑せざるべからざるに至るものにし
 てこれ即ち宗教なれば決して學術の如く有限部内に於て一部より他の部分に推
 及するか如きと同一視すべからざるといふはシューライエルマーヘル氏の説にして
 ヘーゲル氏は其の神を以て之を理想となし吾人の精神は表面は有限の一物に過
 ぎずといへども裏面は理想と相通じて一躰なるか故に有限の心中に無限の理想

を開發して漸く完全なる自由を我に獲得するに至るこれ即ち宗教なりとなすな
 り
 又他の一派の論者ありこは神或は理想の如きものは全く之を爰除して人間の範
 圍に於て宗教を立てんとするものなり獨逸のフュエルベフ佛蘭西のコントの如
 き皆此の一流なり今右の二氏に従ふときは人は決して人以外のことを知り得る
 ものにあらず神を説くも亦人心に畫き現はし、空想にして人の智識上に成立せ
 るものなりといふの外なし故に人間か人間以外に出でんとするは到底望み得べ
 きことにあらずるか故に人間は當然人間以内に満足せざるべからざれば宗教
 も亦主觀的に於て人間に關係して成立すべきものたるのみならず客觀的に於て
 も亦必ず然らざるべからざるといへり而して其の主觀上のごとは誰人も許す所な
 るへしと雖も客觀上の神の如きに至りては之を人間以外の存在となすこと其の
 常なるに此の二氏特にフュエルベフに於ては此の如きも亦人間の心より出でた
 るものなれば人間の範圍外とはいふべからざり故に人間の禮拜すべきものは實は
 人間全躰即ち人類にありて他に存すべきにはあらずとなしたり又コントの意に

比 較 宗 教 學

曰く人間の互に能く互に團結して社會をなす所以のものは實に人に慈悲愛憐即ち人情なるものありて存するによる宗教は所謂此の人情を基礎とし人間を目的として成立すべきものにして彼の聖人君子の如き人情の最も發達したる人の如きは人情を代表したるものとして之を禮拜するも亦可なりとこれ其の人間教と名くる所以なり然れどもフ・エルベッフの説は却て之に反對して人は總て自ら其の利己心を満足せんと希望より宗教を立つるに至りしものにして一切自利の心なかりしならば政治法律より宗教に至るまでも一も由て成立すべき所以なしといへり之を要するに宗教に關する宗教家及び學者の解説は紛々として毫も之を確定するに由なきか故に今は各種の宗教と名けられたるものにつき歴史上の事實に徴し其の間に普く貫通せらるゝ所の一種特別の性質を見出して宗教の何物たるを定むるの外なきを見る

蓋し宗教の定義に關して諸説の未だ定まらざる所以のものは宗教其の物の未だ一定せざるに起因するものにして或は耶穌教の如く神を外界に立つるものあり之に反して内界に立つるものあり又宗教は人間を目的とするものにして道德慈

比 較 宗 教 學

善の道を教ふるを以て其の本旨となすべしといふものあり等種々の異類ありと雖もマクスミューラーは以爲へらく如何なる人類にても苟くも人類たらん限りは宗教を有せざるものなきことは言語學上明瞭なる事實にして而して此等の宗教に各種の差別あるは唯外形上の事にして其の内部に入りて宗教の由りて起りし原因に遡るときは悉く皆一に歸せずといふことなし故に蠻人の所謂宗教と稱すべきものも今日開明人種の有する宗教と稱するものも結局は一因に基くものにして全く人間固有の性情に發するものなり其の發して漸く進歩の階段を越えて宗教の形式をなし終に万差の有様を呈するに至るは實に土地氣候人情風俗等許多の影響を受くるものとすと

マクスミューラー氏の意に曰く凡そ人心の作用は分て感覺、道理、信仰の三となすを得べく此の三作用は即ち宗教の種子となるべきものなり中に就て感覺は相對的に事物を比較認識するものにして相對を離却して無限絶對を感ずること能はざるものなれば之を有限の作用といはざるべからず次に道理とは論理によりて事物を推考する作用にして即ち一部より推して他部に及び甲より乙を尋究するも

のなれば畢竟部分に關する作用にして彼の無限絶對の全體を感ずるものにあらず故にこれまた有限の作用に屬す而して其の無限絶對なる全體を感ずることは全く吾人に有する心性中一種獨立の作用にして其作用は相對有限の範圍を超越し遙かに感覺道理の企及し得べからざるもの即ち所謂信仰の作用是なりと此の説たるマクスミューラー氏以前既にシュライエルマーヘル氏は有限無限の二種の心性作用を立て、論辨したることありしものなれどもマクスミューラーに至りては一層明かに之が區別を判じ且つ進化の説を以て之に加へたるものなり即ち曰く智識の未だ發達せざるに臨みては有限性のものを捕へて之を無限性のもの、如く信仰し得たりしと雖も其の漸く發達するに及びては終に能く眞の無限性の躰を感得するに至るものなり此の故に歴史上宗教心の發達差異を見ることは決して難しとなさずとマクスミューラー氏は此の如く宗教を解釋して言語學によりて以て其の確實なる所以を證明したり

マクスミューラー氏は斯く信仰のみ獨り能く無限を感得すべしと説けるが其の所謂無限とは如何なるものなるかを考ふるに氏は曰く無限とは感覺道理を超越した

るを義とす吾人の感覺智識は時間上に於ても空間上に於ても其の分量其の性質共に皆有限なるものなりと雖も此の有限に對して無限なるもの此に存在して其の無限や固より不可見なり理外なり絶對なり不可見理外絶對此くの如きは唯無限を形容したるに過ぎざるのみと又曰く經驗派の學者は以爲へらく無限は唯有限の事物より抽象したるものに外ならずと然れども其の抽象的の無限の如きはこれ消極的の無限なり今余か所謂無限は積極的の無限なり若し無限を以て抽象的なりとなさば其無限は名のみにして實なきものなるか或は其の無限は既に有限中に包含せられ居るものにして之を抽象概括して始めて無限を得たるものなるべきも有限は無限を有せざる以上は何程之を抽象概括するも其中より無限を産出する理なし然るに積極的無限は全く有限と其性質を異にして而も其存立あるものを云ふ總て宗教なるものは無限即感覺智識以外の躰を認めて其の全部或は一分を以て根基とする點に於ては悉く一致するを見ると雖も古代の宗教にありては僅かに無限の一部を感じたるか或は有限を誤りて無限性の如く信じたりしものあるか知るべからざるものあり然れどもこれとて全く無限を離れて成立

したるものにはあらず然るに實驗派の哲學者・トンは曰く感覺經驗以外に屬するものは決して吾人の知るべき限りにあらずかくの如きは以て今日の宗教の目的とはなすべからず唯吾人の感覺内即ち可知的以内にて其の宗教を立つべきのみと以て其の無限に基く所の宗教を排斥せり然れども若しカントの批判哲學の如きに至りては却て吾人の感覺智識の存在せることを論定したり又經驗學派は曰く人類の智識は其の初め極めて單純にして其の知る所は固より有限の範圍内にありしと雖も漸く發達進歩するに及び無限の思想を開き示すに至るも是全く有限より抽象概括して得たる者に外ならず然るにマクスミューラー氏以爲らく今之を言語學の上に徴するに無限は有限より發達し來りしものにはあらずして兩者同時に相伴ひ來りしものなり即ち吾人の心中には本然よりして此の二者を併有するものなり換言すれば吾人の心中に本來存在せし所の一種の能力が漸く發達して一部は宗教を啓き一部は學術をなすに至りしものなり故に此有限無限の間には先後の差あるものにはあらずとさりながらマクスミューラー氏の説は未だ到底完全無缺のものとして許すこと能はざるものにして多少反對論者の駁撃を免

れずとはいへども氏は進化主義を排斥するにあらず從來の直覺論に進化主義を折衷したる論なれば是れも一種の卓見なり蓋し古代未だ互に交通往來の便なかりし時に於ても人類に既に宗教心の元形を存し居たりしとを證するは獨りマクスミューラー氏のみにはあらず宗教學者は一般に唱ふる所にして進化論者と雖も蓋し此點に對して争はざるべし思ふに従來諸學者の論する所について考ふるに一方の道理に偏局する所のものありては宗教の全躰を以て總て智識道理の範圍内に於て之れか解釋を試みんとし他の之れに反對する所のものには徹頭徹尾之れを直覺に歸し情感に屬せしめんとするものゝ如しこれ共に中正を得たるものとなすべからざるや明なり凡そ人心の作用には智識情感意志の區別を有して各種の現象たりといへども實は互に關聯して一心性の作用なるか故に若し智識上に於て既に無限を覺得すべくんば情感も亦之れを感じ意志も亦之れを捉ふるの能力なかるべからず智は道理に向て活動し情は信仰に向て活動し意志は行爲に向て活動し三者活動の方向を異にするは則ちしかなりと雖も其の本元に至りては三者一躰なり然るに智獨り無限を知るといひ情獨り無限を感じるといふ此の理

如何そあるべけんや余故に以爲らく道理と信仰は共に無限性に屬することを得べし何となれば智識も情感も共に有限と無限の兩性ありて各有限に局れるものにあらざる無限性を有するものなればなり而して其の何れよりいふも宗教を以て無限性のものとなすことは適當の見解といはざるべからざる然らば其の所謂無限とは何物ぞや脚を進むる一步熱之れを按ずるに此の無限なるもの古今東西人智發達の程度に従つて常に同じきこと能はず要するにこれ人智の知るべからざる所に與ふる名稱なるか故に人智の發達の程度に従つて其の知るべからざる所を異にするは理の固より然る所なり然るに此の無限を感得する所の心は元來人類固有のものにはあらずして漸く人智發達の後に出で来るものなりといふは今日學者多數の稱ふる所にして此等の人々は宗教心は人心固有のものにはあらずといふなり且つ夫れ無限なるものは既に述べたる如く必ずしも宗教心のみ之感得する所にはあらずして智識も意志も皆能く之に達し得るあるに於てをやマクスミューラー氏は之れに反して宗教心の固有なることを主張し如何なる野蠻蒙昧の人種と雖も決して宗教心なきものはあらずと説くといへども若し斯くのごとく

有限に對して無限を感ずる心別に存すといふは頗る僻説たるを免れざるものにして此の點に關しては經驗派か論する如く無限の思想は有限より發達したるものなりといふを以て寧ろ其の理を得たるものとなさざるべからざる蓋し其の説に従ふときは既に有限發達して無限をなすといふものなれば有限も實は單純なる有限にあらずして無限を含蓄したる有限と見做さるべからざる此の有限其の中に含蓄せる無限を開發して漸く無限の思想を濶大ならしむるを名けて之れを進化といふなり果してかゝる理あるものとせんには此に一の疑問ありて出で来るべし曰く然らば古代蒙昧の人民現今野蠻無智の種族に至るまで何を以て能く其の有限の心を有し宗教的思想を存することを得るかとこれマクスミューラー氏の宗教心を以て固有なりとなす所以なるべしと雖も余は之れを以て有限中に含蓄せられたる極めて幼稚の無限思想なりと云ふて不可なきを覺ゆ何となれば無限心は本來人類に絶無なるものにはあらず唯有限の中に包まれ居たるものにして有限心の進むと共に無限心も益其の範圍を擴張して極めて高尚の域に到達するものなるか故に野蠻時代の無限は有限に附屬して僅かに其の微光を漏らしたるも

のなるべし換言すれば野蠻時代の無限思想は實に有限に包容されて其形を模糊の間に示したるに過ぎずして畢竟外面には有限のみを示して無限なかりしといふも大なる不都合なかるべし

斯くの如く有限と無限とは元來一物中の二物にして有限の進歩と共に無限も共に開現せられ人智未發達の當時に於ては無限も有限の外面を蒙り有無二限究竟するに其の間に明確なる界線を畫くこと能はざるものゝ如し即ち古代の無限は今日の有限にして今日の無限亦恐くは未來の有限なるに至らん是れ所謂有限無限の進化にして無限の上にも更に無限ありて窮極なきか如し斯くして有限の外皮日に月に脱却せられ無限の眞光愈益輝くものといふべき歟猶ほ一山を攀れば他の一山更に高く高きもの登り終れば復た別に更に高きものを見一進一登窮極なきか如くならん兎に角吾人の心中に於て無限に向て發達すべき一種の無限性を合容し有限より漸々無限を發現することは疑なきことなるべし

宗教發達の次序に關して進化學者中種々の議論ありと雖も要するに其の最始に感ずるものは全觸的にして次に半觸的次に不可觸的なり全觸的とは石や器物の

如き一物の全軀觸覺を以て感すべきものを云ひ半觸的とは山川草木の如き一面一部分丈觸知し得るも全軀を感觸すべからざるものを云ふ而して日月星辰の如きに至ては一部分たりとも觸知すべからず所謂不可觸なり全觸的のものは左程不思議に感せざるも半觸以上に至ては漸く不思議を感ずるものなり故に人智の進歩は全觸的より進て半觸的の山川草木を禮拜して稍不思議の觀念を生し更に進て不可觸の時代に至れば一層の不思議を感得し無限の思想を生ずるに至るものなり日月星辰の光耀ある雲雨煙霧の忽焉生滅するを見ては彼等は皆以て妙力の作用者の伏在するか如く思惟したりしなるべしと雖も更に不可見なる靈魂神明の如きを認め得る時代に及びては最早大に無限靈妙の力を感じたりしなるべし尤も靈魂は野蠻人にありては最初の可見的より一層進て起し得たる觀念なるか故に智識の頗る發達して後に出でたるものにして眼前有形の事物のみに拘束せらるゝ際にありては決して思想の此に及ひしものにはあらずなり

蓋し古代人か不思議を感じて之れを祭り之を禮するに至るものは則ち半觸以上の時代にあることなるが其初めに當りては生死物心の別を見ることが能はず是よ

(二四)
 り一步進んで漸く動物と草木金石の間に差異あることを發見するに至れば先づ野蠻人をして大に疑念を懐かしむるは生死の區別是なりとす試みに自己人間に就きて察するに生存の時には外面に活動を示し睡眠の時には之を見ず然れども野蠻人は睡眠中に起り來る所の夢を以て實事と思惟したり此に於て乎野蠻人は漸く一身重我の想像を起し來り醒時と睡時との區別は自我此にありて他我外に遊ふものなりと解釋するに至れり而して後代發達して無限の靈體となるべきものは即ち此の他我の觀念の發達なり故に野蠻人は生と死との區別を認むること能はずして死は生時の睡眠と同じく自我此にありて他我外に遊ふものと信し唯其睡眠と異なるは他我の外に遊ふに遠近の差あるによる故に野蠻人は父母祖先の死靈は此世界中の何處にか現に存在し居るものとなし之れを供養禮拜するよりして祖先教をなすに至りしものなり斯く人類に既に他我即ち靈魂ありて不滅に存在して遊離し居るものとなすか故に動物にも此の靈魂あるを知りて之れを崇敬し雲の飛び烟の散ずるを見ても亦同様なるか如く考へ乃至半觸的より全觸的の拜禮をもなすものとなりしなるべしこれによりて之れを見ればマクスミューラ

氏の言の如く宗教心は果して固有なるものなりや否やは姑く置くも鬼に角野蠻時代よりして早く既に無限に傾くべき性情を人類の心性中に含著し居たりしことは争ふべからざるに似たり
 斯く人類が宇宙万有に對し天地の現象に接して怪訝の念を發生し終に不思議無限を感じて起りたる所の宗教は名けて之れを自然教といふ而して自然教には万有人類自己の三大段に分るゝものとす中に就きて自己教は即人心教にして自然教中に最も高等のものとなす故に發達の順序よりいふときは人智は直接に其の眼に觸るゝ點より發足して無限に對向して進歩するものなれば宗教にありても彼の山川草木を祭祀する所の万有皆神教其の最初に起り之に次くものは人類即ち祖先教にして其の次ぎは即ち人心教なり人心教は人心即神の教にして自己が其の心性の靈妙に感じて出づる所なるか故に人心教は自己を明にせざれば起ることなきものにしてこれ自然教三大段中最高位に地を占むべきものとす
 以上述べ來る所によりて知るか如く宗教は専ら無限に關するものなりと雖も他の諸學に於ても決して毫も無限を論せざるにはあらず例へば物理學上のエーテ

ルの如きものは吾人の感覺を以て知り得べきものにあらずして物理學上必ず其の存在を必須する所の無限物なり亦光及び電氣の類に至りても實に不思議の者たり殊に宇宙の大勢力に至ては靈妙無限に歸するより外なし物理等既に此の如し況んや哲學の無限を論することは勿論なり故にマクスミラー氏は曰く學問も宗教も其の本元は則ち一なりと若し夫れ古代にありては唯一宗教あるのみ一切の學術も皆宗教の中に含まれ風雨雷電一切の現象は皆神の所爲として怪しまざりしなり然るに人智の進むに伴れて是等諸現象の原因は決して神に存せずといふものありて宗教に反旗を擧げたるものはこれ實に宗教と學術との分派の第一着なり學術は宗教か一切不可思議の下に一括したりしものを分離して之に當然の説明を與へて宗教に對抗したり斯く分離して互に相對抗するに至りしとはいへども學術も亦無限を説かざるにはあらず宗教も亦日に月に有限の表皮を脱して益高尙の無限を開顯せんとするなり

然るに彼の風雨雷電の類を以つて神靈の行爲と稱するかごときものは之れを神話と名けて宗教と見做さざるものあり宗教は神話よりは一層進て無形の靈體を

想定するに至りしものなり然れども神話も宗教も其の本原は實に一なるものにして過ぎざれば從來の學者は之を區分して二種の別を立てたるものなりと雖も近代の進化論者は皆神話と宗教とを同一源より發達したるものなりといふ

宗教の人類とともに進化するものなることは今日諸學者の固より異議を狭ざる所なるが余は今下にスベンサー氏の宗教進化の理を畧述し置かんと欲すこれ比較宗教學者の參考を要するものなればなり

スベンサー氏の社會學に於ける宗教進化の意に曰く凡そ宗教なるものは人類か天地の万象に對して自然に發生し來りたるものにして古代の蠻民か物と物との區別を立つること能はず種類を正しく分別すること能はざるか故に外形上類似のものは惣て之れを同類の如くに見做し例へば硝子と氷とを蠻人に見せしめば必ず之れを以て同一なりと感するなり又實物と實跡を有せざるものとの區別を知らざるが故に反響を以て實に物ありて之を發するか如くに思惟し陰影を見ても亦かゝる一物ありと想像し一切性質の異なりたる物と物とを辨別するの力に乏しきか故に隨て活物と死物とを甄別するに由なく最初は先づ動物と不動物と

によりて生物と非生物とを區別し運動によりて生死の別を立てたりし故今日にても野蠻人が蒸氣によりて運行する船舶を見又は時計等を以て生物となしたるとは吾人の聞ける所なり之を古へに遡りて遠く求めざるとも吾人の社會に於て極めて智識なきもの若しくは小兒の如きは曾未開人と同一の思想を有し居るを見るべしこれより多少進んでは隨意に動き得るものと然らざるものとを以て生物と非生物の區別を立つるに至る犬猫の類は之を追ふときは疾走すれども止まらんとすれば忽ち止まる時計と蒸氣とは自ら隨意に動止するとなしこれ當時の生死を分別する標準なり次ぎに更に進むときは一種の目的に向て活動する者と偶然に活動するものによりて生非生の區別をなすに至る蠻人に於て生物と非生物との間に別を立つるの不明なること斯くの如きものなるか彼等をして最も其の疑を懐かしめたるものは睡眠と及び夢なるべし夢は獨り人に於て之れあるのみにあらず鳥獸と雖も亦之れを有するものなり野蠻人は此の睡眠中の夢を以て實事となし夢中のとを以て總て自己か實に經驗したる境遇なりと思惟し居たり然らば我が身は現に此にありて動かざるに夢中には現に他處に行遊せしとせば

ば野蠻人は益其の如何なる故なるかを疑ひしなるべし而して先きに一言せしか如く終に人に二重の我ありと解釋するに至りたるなり即ち一身に自我他我の別ありて自我は此處にありと雖も他我は他處に行遊するを得るものとなしとなり然れども當時の所謂他我は決して今日考ふる所の心といふか如き無形のものにはあらずして自我と等しく有形のものと思ひ居たりしなり然るに夢中にありては常に能く實際に合せざること甚だ多し則ち實際上に於ては行き得べからざる處に行き爲し得べからざるをなすよりして最後にはこれ果して他我の外出にあらずらんとする疑を起すこととなれり然れども蠻人が他我の出遊を以て實事となし居たりし當時に於ては此の理を以て獨り睡眠のみにあらず總て失神氣絶癲癇中風卒中等一切の精神を失ひたる場合にあてはめ終に死も亦他我の行遊なりとなすに至れり故に死と睡眠とは畢竟同一なるものにして唯死は睡眠の長きものなりとなし死に對するに生に對すると同一の待遇法を用ふるは此に基せしものなりこれ即ち宗教の起原とす野蠻人が死人を鞭ち或は其の名を呼び高聲を發して談話を仕懸けるとあるは曾之を呼び起さんとの念慮にして他我の出遊遠處

に在りて其の聲の達せざるが爲めに醒覺せざるものと思へり斯くて死人を見ること生時に等しくするが故に其の飢を思ひては食物を供へ其の寒を察しては衣服を纏はしめ或は火をたきて之れを温め其のつれづれを慰めんとては終夕墓を守り或は傍に坐して歌を歌ひ樂を奏するに至る或は又生時獵獸を好みし者には弓矢を供ふるなどの類一切宗教的儀式は皆之れより出でたるものなりといふさればスベンサー氏は燈を點じ花を供し食物をそなふる類其の他總ての宗教上の儀式は一として皆野蠻の遺風にあらずといふことなし讀經撞鐘等亦復然りとなし一々其の例證を擧示したり其他氏の説によれば彼の地獄極樂の如きも原人は此の世界の外のものなりとは思はずして死後も此世界に棲息し居るとなし若し海邊ならば島の中に住するとなし山地ならば山の頂き若くは其山を越えて住せりとす又は天に登りしとかの如くに考へ而して其の東西の方角は重もに生時住息せる土地の形狀より思ひつきしものにして且つ生前獵を好みしものは死してもなほ獵を樂むやうに思へり

他我は最初は形骸あるものとして思考せられたりしか一歩進て半物質的のもの

となり多少物質とは異なるものと思ふに至れり次きには氣牀の如き或は物の陰影の如き實牒なき一種の成立の如く思はるゝに至れり此の他我の考は勿論初めは人間の上に起りしものなりと雖も後には總ての禽獸草木にも亦之れあるものと思惟せられ更に一大妄想を引起すに至れり例へば一人の他我の出遊するや他人の他我の入り來りて其空所に宿り或は鳥獸の他我來りて人の身牀に入り込むとありと想像することゝなれり彼の發狂人が忽ちにして其の平常と異なり又は狐憑狸憑の類も皆これなりとして疑はず甚だしきは一人の他我外出せざる場合に於てすら甲の他我入り來りて之れに抗し若し乙者の他我弱きときは甲の他我のために壓伏せらるべしといふ斯くて甲の他我の乙の他我を苦むる爲めに病氣のときには非常に其の身をして苦痛を感せしむるとなし此の理を以て病氣を説明せり又野蠻人は既に生と死とを別つなきか故に生時に強きものは死後も亦強しとし酋長は死しても常に酋長なり悪人は死後もなほ悪人なるものとなすか故に若し自己に怨恨あるものにして死に就くときは其の他我必ず自己の他我を壓伏して入り込み來るべしと恐れ之れを崇拜して其の災害を免れんとし若しく

は他の強き他我を聘して之れを拒がんとすることゝなるこれ彼が所騰の起源なり寺院を建て偶像を安置し之れを供養するが如きは皆之れよりはじまりしことにして世に悪魔の本源となりしは悪人の他我より起り神と崇めらるゝは善人の他我より起る又其後一宗教の基となりたるものも此の他我説の發達なり即ち生前百人乃至千人の首領たりしものにして死せんことあらんには其の他我は死後も同じく此等の部下の他我を支配し居ること生前と異ならずと考へ死後の他我を總轄する一大他我なりと想定し其所謂獨一神なるもの起れり斯くして最初は禽獸草木にも存したりし有形的他我か終には純然たる無形の一大神となるに至れり

進化學者の宗教を説くこと以上の如し故に曰はく宗教は野蠻の遺風なりと近來スベンサー氏の社會學に此の論ありてより以後宗教は實に斯る者なりと信ずる人亦少からされは余之につき一言を費さざるを得ず抑此進化説は表面外見の論にして宗教の全面を説き示したるものにはあらず若し更に翻て内部より考察する時は宗教をなすべき本心即ち無限性の宗教心は人類固有の者たるは前に述べ

たりし如くにして唯野蠻人にありては其の形甚た劣等なりしといふにありて其位置より漸く發達して高等の域に達するといふもこれ唯外形上のことのみ内面よりいば高等に達すべき丈の要因は下等なる外形の中にも既に業に含容し居れり譬へは櫻の種子は一小粒に過ぎずといへども爛々たる春色をなす所以の者早く既に彼の小粒中に含まれ居るなり宗教心も亦之に異ならずるなり最初野蠻下等の形を取りたる者も其心の中にては高尚深遠の無限性の美花を開くべき原因は早く既にあるなりスベンサー氏は唯其の外部のみを知て未だ内部を知らざるものなり換言すれば人間固有の一種の宗教心ありて漸く發達し來る所以を知らざるものなり

宗教の分類

宗教の分類法に大體二種あるべし一は教義により一は人種による是なり(一)教義より分類するにも亦種々ありといへども無神教及び有神教の二となし有神教はまた一神教と多神教との別をなす多神教中には日月星辰の如き物質を禮拜するものと禽獸草木の如き生物を禮拜するものと英雄豪傑の如き人間を禮拜するも

は他の強き他我を聘して之れを拒がんとすることゝなるこれ後び祈禱の起源なり寺院を建て偶像を安置し之れを供養するが如きは皆之れよりはじまりしことにして世に悪魔の本源となりしは悪人の他我より起り神と崇めらるゝは善人の他我より起る又其後一宗教の基となりたるものも此の他我説の發達なり即ち生前百人乃至千人の首領たりしものにして死せんことあらんには其の他我は死後も同じく此等の部下の他我を支配し居ること生前と異ならずと考へ死後の他我を總轄する一大他我なりと想定し其所謂獨一神なるもの起れり斯くして最初は禽獸草木にも存したりし有形的他我が終には純然たる無形の一大神となるに至れり

進化學者の宗教を説くこと以上の如し故に曰はく宗教は野蠻の遺風なりと近來スペンサー氏の社會學に此の論ありてより以後宗教は實に斯る者なりと信ずる人亦少からされは余之につき一言を費さざるを得ず抑此進化説は表面外見の論にして宗教の全面を説き示したるものにはあらず若し更に翻て内部より考察する時は宗教をなすべき本心即ち無限性の宗教心は人類固有の者たるは前に述べ

たりし如くにして唯野蠻人にありては其の形甚た劣等なりといふにありて其位置より漸く發達して高等の域に達するといふもこれ唯外形上のことのみ内面よりいば、高等に達すべき丈の要因は下等なる外形の中にも既に業に含容し居れり譬へは櫻の種子は一小粒に過ぎざといへども爛々たる春色をなす所以の者早く既に彼の小粒中に含まれ居るなり宗教心も亦之に異ならざるなり最初野蠻下等の形を取りたる者も其心の中にては高尚深遠の無限性の美花を開くべき原因は早く既にあるなりスペンサー氏は唯其の外部のみを知て未だ内部を知らざるものなり換言すれば人間固有の一種の宗教心ありて漸く發達し來る所以を知らざるものなり

宗教の分類

宗教の分類法に大體二種あるべし一は教義により一は人種による是なり(一)教義より分類するにも亦種々ありといへども無宗教及び有神教の二となし有神教はまた一宗教と多宗教との別をなす多宗教中には日月星辰の如き物質を禮拜するものと禽獸草木の如き生物を禮拜するものと英雄豪傑の如き人間を禮拜するも

のどの種類あり又無神教中には哲學的の無形の理體理想を本體とするものと國家社會を目的として人間の道德實利を本意とするものあり其の他無神教者中懷疑學派唯物學者の如く全然宗教を蔑視するものもあるなり

然れど最も普通に行はるゝ所の分類法は自然教と天啓教の區別是なり天啓教は即ち直覺教にして直覺教に對すれば亦道理教あり而して道理教と自然教とは同一の意にはあらず自然教は自然の理法に隨順して發達し來りたる者を云ひ道理教は道理上に立つる所の宗教を云ふ道理教に反するもの之れを理外教となす理外教は宗教を道理以外に置き到底道理によりて知るべからざるものとなす然るに道理に高等と普通とあり即ち無限性の道理と有限性の道理とありて普通の道理にて理外となすものも高等の道理によりて知り得べしとなすものは超理教なり故に超理教は理外教と道理教の中間に立つものゝごとし若し彼の理外教徒に向て理外のものに至ては吾人は如何にして之れを知るべきかと問はばこれ神の神秘天啓に屬するものにして到底我れ等の知り得る所にあらずといふ故に亦之れを呼んで神秘教ともいふなり

以上の外なほ更に心理上より分類するときは情感教及び智力教の二となるべし余は亦別に情宗智宗意宗の三を分つとを得るものとす例へは佛教中淨土門は情宗なり天台華嚴等は智宗なり禪宗の如きは意宗なり或人は儒教を以て情宗とし佛教を以て智宗とし耶蘇教を以て意宗となしたることあり哲學者の説につきていふときはシライエルマール氏は情宗なりヘーゲルの如きは智宗にしてシロハーンハウエル氏は意宗なりと謂ふも可ならん

次に社會上に對して樂天教と厭世教との二に分つとありなほ其の他に運命教とも稱するものあり運命教には自然の理法に一任し天命天運に順はんとするものと人の運命は神の豫定に在るか故に人力の如何ともすべからざるものとなすとの二あり希臘のストア派の如き其の天命論に屬すべきものにてマホメットは即ち豫定説なり又佛教律宗の如き嚴肅教と稱すべきものあり希臘のピタゴラス及び近世にありてはカントの説蓋し之れに近しとす

上來の諸説に反對して立つるもの之れを人間教とす人間教には亦人心を本とするものと社會を本とするものとの別あり社會國家を目的とするものはコント氏

なり此の心即神なり此の心を清淨にすべし又神は人心より造り出したるものにして我心の中に神の性質を有すと説くものはフニエルハッフ氏なり
(二)次ぎに人種上より分つものは左の如し即ち人種によりて分つなり比較宗教學の研究は主として此の分類によるものとす

一、埃及教(今日は埃及は回教國なれどもこれは埃及の古教を云ふ)

二、バビロン教
三、アッシリヤ教

四、猶太教
舊(耶蘇教以前の)猶太教

五、孔子教
新(耶蘇教以後の)猶太教

六、印度教(婆羅門教)

七、日本教(神道)

八、印度の佛教
九、支那の佛教
十、パルシヤ教(火教)

十一、日本の佛教

十一、希臘教并羅馬教(共に耶蘇教以前の希臘及羅馬固有の古教を云ふ耶蘇教の希臘教羅馬教を云ふにあらず)

十二、スラボニック教(スラボニック人種固有の宗教)

十三、チョートニック教(チョートニック人種固有の宗教)

十四、摩哈麥教(回教)
十五、亞米利加教(米國の古教)

十六、耶蘇教

今比較宗教學として比較研究せんとするものは即ち此等の諸教なり其の他なほ細分するときは無数の宗派あるべし次ぎに耶蘇教の宗派を示すこと左の如し
一、アルメニヤ宗(アルメニア國にて紀元二百年の頃耶蘇教より第一に分派したる宗派なり)

二、希臘宗(希臘土耳其等に現今行はるもの)

附魯國希臘宗

三、加特力宗(舊教亦一名羅馬宗)

四、プロテスタント宗(新教、此の中亦幾百の分派あり重なるものを左に示す)

- (イ) ルーテル宗獨のルーテル之れを開く
- (ロ) カルピニン宗(佛のカルピン之れを開く)
- (ハ) 英國教宗(エписコパル宗即ち監督教會)
- (ニ) 蘇國教宗(プレスビテリアン宗即ち長老教會)
- (ホ) 改革宗(和蘭に行はる即ちレフォームド、チャーチと名くるもの是なり)
- (ヘ) メソヂスト宗(美以美教會或は譯名守法教)
- (ト) 獨立宗(一名組合教會即ちコングレグーシナル宗)
- (チ) パフチスト宗(浸禮教會)
- (リ) シェーカー宗(同朋宗即ちフレンド宗)
- (ヌ) モラビアン宗
- (ル) イルピンガスト宗
- (ヲ) モルモン宗
- (カ) エニテリアン宗
- (ヨ) ユニホルサリスト宗(宇宙神教)
- (タ) 自由神教(一名ラシヨナリスト宗)

其他耶蘇教の諸派凡そ三百餘の多きに至る一々擧ぐること能はず人智の進

第一講 埃及の宗教

歩するに從ひて其の信仰大に衰微を來せしも社會の習慣及交際上の必要よりして猶ほ舊風を存するなり然れども名を耶蘇教に假りて其實然らざるもの多し彼のユニテリアン宗の如き其の類にして獨逸佛蘭西等にはラシヨナリストと稱するものあり是れ亦た一種のユニテリアン宗なり

埃及及びバビロンの宗教は宗教中の最古なるものにして今日に存せるものにあらざれば或は世間の笑柄に値ひするに過ぎざるが如き感なき能はざるものあらん然れどもかゝる太古の人智未開の當時に於ける宗教思想を考究するは實に學者に取りて頗ぶる有益にして興味深きものあるを知るべし今日學術界の勢は實にかゝる考察中より眞理を發見せんとするの傾向を取りつゝあることを知らば古代の神話怪談亦大に吾人の顧慮すべきものあるなり

埃及の地球上最古の開明國なりしことは皆歴史家の許す所にして近來發見せられたる古碑等によりて之れを驗するに確かに三千年以前に既に大に文化の進み得たりしことを證すべしといふ彼のピラミットの塔が雲を凌ぎて天を衝けるを

見ば當時の埃及の人々は如何に繁殖し其の工業も如何に開進したりしかを想像するに餘りあるべし而して此の人智の進歩のしかく速に人々の繁榮しむる盛なりしは實に氣候地勢の然らしめたる所にして天地自然の賜なり殊にナイルの河の年々溢れて自然に土地を肥やすが如きは大に人口の繁殖を助けたるや疑なし故に宗教も亦早く其地に開くるに至れり

埃及古代の宗教に關しては學者間に凡そ二種の説を分つべし一は曰く埃及古代の宗教はもと一神教なりと雖も此の一神より終に種々の形象を取り來りて多神教となりしが故に其の多神中には頗る高尚なる一神教の道理を含有するものなりと然るに他は之れに反して埃及の宗教は純然たる多神教にして草木禽獸を崇拜する極めて劣等の宗教なりしが漸く進歩して後に一神教の性質を帶ぶるに至れりと若し第一説によるときは埃及の宗教は一神教より墮落して多神教となりし者なりとせざるべからず然るに人智の進むに従て宗教の墮落するといふ道理はチト信し難し然らば第二の説に従ひて下等の宗教が漸く進みて一神教に近きしものと見んか然れども多神劣等の宗教か俄かに一神教と化し去るの理も亦信

し難し思ふに古代に高等劣等の二種の宗教併存せしならん而して埃及固有の宗教は草木禽獸を禮拜するか如き最も劣等の宗教なりしと雖も歴史以前に亞細亞地方より入り來りし人種か高等の宗教即ち亞細亞固有の宗教を傳へ遂に二種の宗教の古代より行はれしもの、如し此の亞細亞人種は埃及に入りて高等の位置を占めたるを以て其宗教を信せしものは少數なるに拘らず勢力を有したるに相違なし此事は亞細亞古代の宗教と比較すれば容易に了解すべし

埃及固有の宗教即ち其所謂下等の宗教には二種の別あり一は動物を崇拜する者なり二は死王及び死人を禮敬するものなり動物を崇拜するものは何れに至るとして古代は皆然るもの、如しと雖も未だ埃及の如く甚だしきものはあらざらん埃及人は總て動物には一種の魔力神力を有するものとなし其の何種たるに關せず一般に種々の動物を畏敬したり而して此の魔力神力は直ちに人類の幸不幸の上に關係ある者となし各地方に一定の崇拜すべき動物ありて其魔力の上に地方の保護を依頼し又各眷族に特有の動物ありて之を崇拜せり而して最も一般に奉信せられたる者は牡牛、鱈、猫、河馬等の動物なりとす次に死人を拜禮するとも諸

(四二)
 國に見る所なりと雖も埃及人は特に甚たしき者なり其の墓の壯麗なる其の粧飾の美を盡したるを見るも以て之を知るに難からず且つ其の死骸を保存せんがため力を用ひたりしは、ミイラを以て證すべし従ひて死人に對する儀式を鄭重にし之れを以て最も神聖貴重なる者なりとなせり埃及人は死經と稱するものを貴ぶと甚だしく此の經の功德によりて死者は冥途の旅行を安全に遂ぐるを得るなりと信せり蓋し此くの如く埃及人が死者を丁重にするに至りし所以は勿論死者をして冥界惡魔の害を免れしめんとの念より發したる者なるべしと雖も亦當時の僧侶等の種々の附會説をなして人民を誘導する勸善懲惡の方便となしたりしこと與りて力あり埃及固有の宗教は實にかゝる有様なるものなりき之に反して亞細亞より來りしと想定せる宗教は頗る高尚にして其思想は即ち宇宙万有の理法に關する觀念にして此の神の主なるもの三あり一はオシリス(Osiris)にして二はラー(Ra)なり之れを埃及の神學上に考ふるに彼等の宗教思想は正しく光明と暗黒の争闘及び生と死の争闘の二種の考より成立するを見る安(太陽)は即ち光明の神にして之れに對する暗黒の神を名けてアハプと(大蛇)といひ生と死と

の争は即ちオシリス神とタイフォン或は一名セトとの争を以て表示せり此オシリスとタイフォンとはもと兄弟にてオシリスの曾て亞細亞地方を巡遊するに當り弟タイフォンは其の位を奪はんと欲して之れを殺害し屍を海中に投じたりしがオシリスの妻イシス之を聞きて大に慟哭し其の涙流れてナイル河の源をなせりといふ後オシリスの子ホラスはタイフォンを殺して其の仇を復したり埃及人はオシリスを以て死後もなほ冥界の長官なり一切の死者は皆其の支配を受け居るものなりと信じたり故にオシリスは即ち善神にしてタイフォンは惡神なり而してラー神も亦善神にしてオシリスの幽冥界を支配するに對して現世界を支配するものとす埃及にありて最も尊信せらるゝ神は先づ此の二神即ちオシリス及ラーなり又オシリスの妻たりしイシス女神も一般に崇拜せり之を要するに埃及の高等の宗教は人心の上にては善惡二元物界の上にては明暗二元の思想を表示したるものにして此の二種の元素互に相争ひ新陳交代して止まざるものとなす故に其宗教は世界上の觀念より起りたるものにして其思想は頗る高尚なり若し他の一方より見るときは埃及人は山川草木を拜し禽獸死人を

尊敬するなど最も卑しむべきものなるに似たりと雖も此の一方より考ふるときは宇宙の高妙の理を表示して大に稱するに足るべきものあり此二者の思想餘り懸隔するを以て埃及の宗教は二種の宗教の相混じたるものなるべしといふなり而して其所謂高等の宗教の亞細亞の宗教に似同する所あるは後に至て知るべし右の諸神の外なほプター(Ptah)と稱する一神ありこれ万物創造の神にして亦頗る人の尊敬を受くるものなり埃及の古説にては万物の創造は一神によりて成るにあらず總じて八神ありとなし其神皆宇宙の力を代表したるものなり希臘人の記する所によれば埃及の神を分ちて三級とし第一級は今の八神にして第二級に十二の神あり第三級の神は其の數甚多しといふ先づ此の八神を數ふるに二種の説あり即ち左の如し

| | | |
|------------|--------------|------------------------|
| プター(Ptah) | ラー(Ra) | シュー(Shu) |
| セブ(Seb) | オシリク(Osiris) | セト又タイフン(Sei or Typhon) |
| ホルス(Horus) | セベク(Sedak) | |

又は第二説によれば

| | | |
|-----------|-------------|--------------|
| アメン(Amen) | メンター(Mentu) | アタム(Atum) |
| シュー(Shu) | セブ(Seb) | オシリク(Osiris) |
| セト(Sei) | ホルス(Horus) | |

此等は重なる諸神なりされば天地の創造は此の如き多數の神によりたるものにして特に火の神を以て其の最とす火の神とは即ちプターにしてメンファイスの神なり而して此の神を宇宙の靈となす其の他或は濕の神風の神水の神等ありて宇宙の現象を悉く神に配當し此等の諸神を以て總て之れを宇宙万有の創造者なりとなすなり日月山川草木の類に至るまで亦皆各神ありて之れを創造したりといふこと一に此の理に準ず

埃及に於て初め六朝の間はオシリス、ラー、プターの三神最も尊崇せられたりしが後ピラミッド塔の建てられたる頃に於ては王を以て神に配し即ち帝王の死したるものを神として祭ることとなり且つオシリス、ラー、プターの三神の如きも次第に互に混同せられ加之神てふ考か漸次に可見的より不可見的に移りつゝ發達し來れり且つ此の頃に至るまでは僧侶の權力未だ甚だ強からざりしといへども漸く

(四六)

其の勢を得るに及びては從來極めて單純なりし墳墓の裝飾葬式等に關する諸事は大に費用を擲て之を營むこととなりたり(尤も此の以前僧侶に勢力なかりしときといへども)宗教の盛ならざりしにはあらず其の後第十一朝より第十四朝に至る間にありては其の國權埃及上部の地方にありしもの漸く下部地方に遷りたるがため隨て神も亦次第に變じ來るは勢の自然なり即ち各地の神の中に就て其の最も權力ある地方の神最も尊崇さるゝに至るは數の然る所にして今は下部地方の神を以て第一位に置かるゝこととなりしなり軍神のムンと及び農神ミンカ等が重要な位置を占むるに至れり斯く宗教の種々の變化種々の異態を及び最後は僧侶の權力益増大して魔術の如きも流行し來り其の結果王權は終に僧侶の手に歸し所謂僧侶朝廷を見ることとなり然れども後再び一變して僧侶の朝はやみやがて第十八朝以下に至りては他方より種々の諸神混入し來り加之最初には數多の神たりし埃及の神も漸々一神に近かんとするの傾向を示し例へばアメンとホルスとは同一の神とせられ又ホルス、ラー、クナン、メンタ、タン此等の諸神は總て同じく太陽を代表するものにして是れ時間の異なるに應じて其名を異にする

なり埃及の神の偶像はもと其體は人間にして頭は多く動物を現はすものなりといへども十八朝以下他國の神の入り來りし以降は頭も總て人間様のものと變じ大に其の狀態を異にせり以上の外埃及の神に關しては極めて妄誕不經のこと多く種々の傳説ありといへども今は之を述ぶるの要なしされど埃及の宗教は比較宗教學上大に參考すべき所あり今試みに之を一言せん歟

凡そ宗教の起原に關しては此に二種の説あるへし一は曰く吾人の感覺上得る所のものより抽象し得たる無形の概念を以て神等の觀念を造立し依りて以て成りし者之を宗教となすと進化論等一般經驗派唯物學者此の説をなす古代の神なるものを見るに多くは動物人間或は山川草木等感覺上のものを禮拜するは以て之を證するに足るといふ然るに他の一説に曰く人間には本來無限てふ高尚の觀念を有し唯之を現はさんかために有形の相を借り來りて禽獸草木山川日月の類を用ふるものに過ぎず古代の偶像の如きも亦決して吾人の眼に映ずる所の形相のみを以て其の意味の全體とはなすべからず人類か此の大自然に接して之を觀察する時感得する所の美妙無限の大勢力の思想を有限の形に托したるものに過ぎ

（四八）
 ず此の故に宗教なるもの實はこれ先天性のものなるのみと以上の兩説互に相争ひて未だ其の是非を決するに由なしといへども現今に於ては經驗説を取るもの多くして先天説に左袒するもの最早少し何は兎もあれ今埃及の宗教にありても亦必ず此の二面の見解あるべし即ち一方より見るときは極めて劣等にして言論に上ぼすに足らざるもの、如し、エジプトの一方より言ふときは又甚だ高尚なるものに似たり、チロニ氏（注）の宗教史教授の説によるときは埃及固有の宗教思想は最も下等なるものにして拜物的多神教なり其の光明と暗黒との争の如きは實は亞細亞より輸入し得たる所の思想なるのみと、こはこれ歴史以前の事、今にして確断すること能はずといへども何れにしても埃及の宗教は二面の見解を有し得ることは知り得らるべし然るに此に先天派に與ふべき一の疑問は果して先天的の宗教思想か實に存すとせば何故に禽獸草木の外縁によるを要せず直ちに其真相を顯出すること能はざるかといふことは是なり（尤も太古は却て一神を拜ししかも偶像を拜せざりしが中ごろより此の一神は變じて偶像の神となり直接に吾人の前に現はれて愛憎賞罰を行ふが如き神となるに至りしがこれもと僧侶が利慾

心によりて此に至りしものなりと説くものありといへども是は比較宗教上取らざる所にして姑く置て論ぜざるべし）先天論者乃ち之に答へて曰く古代未開の當時にありては其の思想固より未だ極めて幼稚にして到底最初より完全無缺の思想なりしにはあらず僅かに其の萌芽の有形の發縁によりて外に現はるゝとを得たるものに過ぎずと蓋し今經驗論者の説に従ふとなさん乎吾人の智識は到底經驗の以外には一歩も脱すること能はざるか故十の經驗は永劫十にして十以上の智識となることを得べからず然るに今十の經驗進みて十五二十の智識となる所以のものは實に吾人思想の傾向は常に無限に進まんとするに由らんはあらず宗教思想も亦此の理によらずといふことなし然らば則ち經驗派の唱導する所未だ必ずしも確實なりとは許すべからずさればとて先天派の所説亦決して圓滿なること能はざるものある歟想ふに埃及の宗教も亦此の理によらずや

第二講 巴比倫の宗教

巴比倫の宗教を知らんと欲せばカルデア（Chaldeae）の今日に現存せる片々の肥録にたよるの外すべあるべからず此の肥録や既に断片殘缺今之を集めて順序を與へ

年月を加へ若しくは一書籍の一部分のみより其の全体を推測するなどいとも困難の事のみに屬すといふ。近來英獨諸國此の研究の道頗る開けたるか故便利を得ること漸く多し

カルデアの都城をエリドール(Eridu)といふなほゼルサレムの耶蘇教メッカの摩哈麥教に於けると一般此の地實に亦カルデア宗教の中心にして該國第一の神を鎮祭する所となす其の地波斯灣の近傍に在りて古代はなほ海岸より内部に入り込み居たるものゝ如し其の第一の神をイー(En)といふ此の神は人民一般の崇拜せるものにして海神なれば其の水を掌るは勿論海外の世界(即ち幽冥境)をも支配するものとす此の教を奉ずるものは直接に神の威容に接見することは固より能くすべからずといへども海波の音潮の干潮の聲を以て神の聲なりと信じて之を拜し風雨のために激浪怒濤の押寄せ來るときは見て神怒なりとなして大に懼れたるものゝ如し此の神は常に海底の岩洞に住し玉ひ人は之を接見するに由なしといへども神は能く一切の事を知り悉し玉ふといふ之を説く者曰く此の宗教はもと恐くは海上よりカルデアに入り來りし人種の與へたる思想にして且つ此人種

は想ふに航海を以て其の業となし居たる者なるべし何となれば神に與ふる所の名は總て海若しくは船舶等に屬すればなりと斯く神は常に海底に在して其形を示すことなきが故に唯海の有機によりて神を想像するに過ぎずして日の將さに没せんとするるとき海面より送り來る所の輕風を以て神の呼吸なりとなし神の我に告知する所と稱し一切斯く海を以て神は其の考を示し吾人は海によりて神を知るの便宜となじたるものなりしなり然るに此に又神と吾人との間に立て神人を結合する所の一の媒介者ありて吾人は之によりて神に通ずることを得るとなす即ち朝たに東天に現出して世界の暗を照破し夕べに西海の裏に沈み去りて其の影を失ふ此の一大怪光は果して何物ぞヤカルデア人は以爲らくこれ神の子なり此神子其の光明を放ちて吾人を照すは實に神の大慈なり神子は朝たに出現して人間の狀態を檢察し善人を監督し夕べには去りて之を其の父に報告すされば人類は此の神子即ち太陽の媒介により神と相通ずることを得るなりとす此の太陽は呼んで之をマルダツガ(Marduga)といひ通常之を詠りてメロダツク(Meroduck)といふ又此のマルダツクは此の世界の疾病人の有無をも檢して之を父に告げ父

より其の療法を授かるものなりと信ぜられたり此の太陽之を畫の神となす
 カルデア人も亦亞細亞古代人一般の思想の外に出づるにあらず即ち光明と暗黒
 (人の上に取れては善と悪となり)との争闘を想像し所謂畫の神即ち善神なるメ
 タメラに對して夜の神即ち惡神なるものを立て相争ひて交互勝敗遞次に出没す
 るは此を以てなりといへり夜の神とは即ち龍神なり(蛇を以て總て惡の代表とす
 ること古代にありては殆んど一般なり舊約全書も蛇のことを説き埃及の夜の神
 も蛇なり我邦神代史中にも蛇の語あり何故に東西斯く其説の合するや之を夜の
 女王と稱すとれ即ち惡神にして之に對してメー及び其の子メロダツクは共に善
 神なり此善惡兩神の争闘は開闢以來曾て止みしとなくしかも此の惡神は七頭七
 尾にして地球を抱纏し夜は特に堅く持ちて己れのものとなせり然るに旭日曠々
 の光明は善神が女王に放つ所の神矢にして之がために龍神は負傷を蒙り其の尾
 を弛むるか故光明の神は益大に勢を振ひ龍を以て女王の頭を碎き龍神に附屬せ
 る黒雲までも全く跡を隠くして世は總て善神の支配に歸するに至る之を光明の
 神の全勝となす然るに神子は此の全勝を以て其の父に告げんと欲し將さに西方

の關門に入らんとすむべき諸神は再生して神子の足に噛みつき神子は傷を負ひ
 辛勞して免れ去る勝敗巡環斯の如くにして終に窮極を知ることなしといふ
 此の如きの怪談畢竟一笑に値ひざるに過ぎざるが如しと雖も亦大に研究を要す
 ぬものなきにあらず何となれば古代人種の想像は支那印度希臘其の他我が日本
 に於ても常に殆んど同一なるが如きも人間の想像が必ず同一の有様に歸するは
 何等の理ありて然るが蓋し頗る興味ある問題なるべければなり且つ人類が天地
 の不思議に接して種々の想像をめぐらしたるの跡も亦甚だ快なるものあり然れ
 ども蒙昧人が天地の不思議を感じたると同様の有様に於て今日の我等も亦實に
 此の不思議に接し不思議を感じ居るものなり
 カルデア人はかく明暗善惡二元の争を想像せりなほ彼の埃及のオシリスラーに
 對してセツトアバツプを説きたると趣き全く相等しといふべし埃及の宗教を以
 て其の思想は實に亞細亞より入りしものにはあらざるかといふも此に至りて其
 の一理あることを發見し得らるべし而してカルデア人は主として唯此の光明の
 神の姿を信ずるものにして太陽は神の子なるか故に刻實すればカルデア人は實

に一神を奉じたるものといふべし。右はカルデア(即ち巴比倫帝國中最古の國名)のエルド(即ちバビロン)府に於ける神に關して略説したるものなりといへども以上の外にも各地方には又其地方固有の神ありて各之を尊崇し例へばウル(即ちバビロン)府にては月の神を奉じたるか如き或は火の神、死の神など幾多の神は皆各地に祭祀せられ畢竟各都邑は皆各宗教の中心たりしものなり此の事たる思ふに巴比倫の文明を助けたる一大原因にして、人民は皆宗教のために此等の都邑に集まり來り隨て學校其の他の一切は此の都邑に設けられ之に伴ひて教育の道も早く開け(紀元前二百五十年頃には教育の道も既に大に開けたりといふ)以て西部亞細亞最古の文明國をば此に興すこととなりしなり、されば此等の事情よりして考ふるも其の僧侶の埃及の僧侶、印度の婆羅門等と等しく非常の權力を有し居たりしことは推想し得らるべし。

巴比倫の宗教につきて其の各都邑に各個固有の宗教の存在し得たることはこれ實にペロポネソス宗教の他の宗教と大に異なる點として見るべき所なりウル府はアオラハムの誕生したる地にして有名なる都市なり此の地には月神を祭る大なる

る殿堂あり此の土の人は月は日の前に在り日の神は月の神の子なりとして深く月神を信奉したるものなりといふ。當時カルデアは斯く各都市相分れて存立ししかも各一帝國なりしといへども次第に強は弱を併せて小は大となり最後に南北兩巴比倫帝國を生ずるに至れり其の後紀元前二百二十年に於て一層權力ある王カンムラビ(Cannurabi)なるものありて此の南北兩巴比倫を合して一帝國となし巴比倫府を以て其の首都と定め(此の時迄は巴比倫は第二等の都府なりきたり之を巴比倫帝國となすなり政治上に斯る變遷ありて巴比倫は既に政治の首都と定まりし以上は隨て宗教にも其影響を及ぼし從來巴比倫の神たりしベル(即ち日の神)はやがて帝國全土の神と變化したり此の日の神の父は即ちイー(即ち世界神)にベル(即ち日)と稱する神ありしが後にはメロダック(即ちイー、ベルの二神性質を併有せるものとなり名をベル、メロダック(Bel-Meroduck)と稱し之れが美麗の殿堂は巴比倫に於て造營せられたりカンムラビの朝は二百年間連続したれば之と同時に宗教も共に盛大を極めて巴比倫は世界宗教の中心となり世界に其名を知らるゝこととなりしが後紀元前六百二

十五年所謂新巴比倫なるもの起る。其の起るは、カルデアの建國は諸説一定ならずと雖も一般には紀元前二千二百三十四年なりと云ふ。而して巴比倫帝國の起りしは同二千二百年なりと云ふ。巴比倫の亞西里亞に滅されたるは同一千三百四十三年なれども此時未だ帝國全幹が亞西里亞の版圖に歸したるにはあらず其の全幹が亞西里亞に屬したるは同七百四十四年なり。後同六百二十五年新巴比倫は起れり此の新巴比倫を起したるものを**ナバパネッサ** (Nava Palsasar or Nabopolassar) と云ふ。新巴比倫後に波斯王**サイヌス** (Cyrus) のために滅されこれ實に紀元前五百三十八年なり再び反したることおれども亦征服せられ最後に同三百三十二年歴山王の征服する所となす。新巴比倫は同三百三十二年に滅され、バビロン (Babylon) は同三百三十二年に滅され、メソポタミア (Mesopotamia) の新巴比倫を起したるときは宗教の最も盛なまじどきにして之を極盛の時と見做して可なるべし。後漸次に衰へたるもサイヌスの手に滅されたるも**サイヌス**の手に滅されたるも其の固有の宗教を許して其の人心を收めんとするの政略を取りたる故依然また存在したりしと云ふ。當時**ベブローニ** (Bebroyni) 人が巴比倫に拘

留せられたりしかばこれより猶太教の風大に巴比倫教の中に混入したりしが巴比倫王**ネブカドネザ** (Nebuchadnezzar) 猶太の都**ゼルサレム**を滅して猶太人を擄にして巴比倫に留置したるなり。後新巴比倫の滅亡と共に宗教も漸々變化して終に全く其の形を失ふに至れり。次下巴比倫教に連絡して**亞西里亞**教を畧述すべし。

第三講 亞西里亞の宗教

希臘及び羅馬以前にありて吾人の最も注意すべきは亞西里亞人なり。此の人種は巴比倫即ちカルデア人種と同種族にして初めは巴比倫と同じくカルデアの支配に屬したりしも紀元前一千二百五十年頃に獨立して勢漸次に増大し終に巴比倫の右に出づるに及び。後六百年間は亞細亞の西部より埃及迄を支配するに及び。古代にありては未だ曾て見ざる所の強大なる帝國を形造るに至りたり。此の六百年間歴史上分ちて之を二段とす。第一世紀は即ち紀元前二千二百五十年より同一千七百四十五年の間にして**亞西里亞**の獨立より其の中興までを指し。第二世紀は一千七百四十五年即ち**チクラス**、**ピレンサー** (Tiglath pileser II) の中興より同六百二十五年迄を指す。此の六百年の間の亞西里亞は常に強大なる帝國なりしのみにはあ

ラザ技術、工藝、美術百般の事に至るまで古代唯一の發達をなしたりしなり
 (五八)
 亞西里亞人は巴比倫と同一多神教を奉し種々雜多の神を拜し各神皆固有の形貌
 性質及び殿堂ありしかも此等の諸神たる其内部の思想上より考察するも埃及人
 が一神の作用を以て種々の神となしたるが如き形跡を見ず換言すれば亞西里亞
 の多神は(巴比倫も)亦純然たる多神にして一神の思想より起りたる類ひの者には
 あらざるか如し而して此等の諸神はなほ恰かも人類と等しく一の社會を形成し
 時々相會して所謂會議を開くことあり(我が國の俗説に神無月の説ありて其月に
 は諸國の神々か出雲大社に會すと云ふにひとし)此の會議の席に於ては神々往々
 論争を起して互に相鬪ふに至ることありこれ畢竟各神が皆利己のことより起
 る所なりされば神國の上にありても戰爭を起すことは常にある所といふ
 此の如き數多の神の中に於て亞西里亞の神に於ては別に主神と稱すべきものな
 し唯神の中に階級の上下ありといへども上級の神決して下級の神を支配するの
 權利あるにあらざるかゆゑに其の間毫も一神的思想を見出すことなし尤も中
 に於て神中の王若しくは神中の神等と稱する名稱を有するものなきにあらざり

いへども、それは單に名目上の事にして實は人々各其の自己の禮拜する所の神を定
 めて更に他の神を顧みることなし又此等の諸神には多神とはいへ實に一定の數
 限ありて或は四千なりといひ或は五千なりといふものもあり然れども就中一般
 に尊崇せられ或は紀念祭を行はるゝものは主もに二十に上ることなし今此に述
 べんとする所は此の二十神中其の亦最も重なるものなり
 既に述ぶるが如く巴比倫、亞西里亞の多神は其の中に所謂主神と稱すべきものな
 しと雖も、殿堂中に於て常に其の首座を占むる所の神なきにあらざりされど、これ唯
 階級上の首座神にして、それが主宰神にもあらざり亦他の諸神此の一神より分出した
 るにもあらざり、巴比倫の首座神はラーなり、亞西里亞の首座神をアッシュール(Ashur)
 といふ或は曰くラーとアッシュールとは實は同一神なるのみと兩國も同じくカ
 ルデアの支配下に屬せしものなれば其の宗教も或は相混じたるの想像も亦甚だ
 故なきにはあらざるに似たり且つ此のアッシュール神は亞西里亞國全躰及び其國
 王の守護神なる點より見るもラー神と關係甚だ相近きものゝ如し然るに亦他の
 一説によるときは曰くアッシュールとラーとは大に其の性質を異にするものにし

てラーはアッシュールの如く其の徳を表面に現示したるものにはあらず蓋しラーなる名稱はもと唯神といふの意義に過ぎずして種々格段の性質作用等を有するのこゝろなし故に記録に記されたることなく石碑等に其の名を銘せられ或は形像を刻まれたることなきなり何となればそは實に尊き神にして刻むべき格段の形跡もなく祀すべき格段の性質もなければなり然るにアッシュールは之れに反して普通の徳を以て現示され記録せられ碑も建てられ像も刻まれたるなり此の故アッシュールは蓋し亞西里亞國固有の神にしてラー(ラー)は亞西里亞にてはイルロと呼ぶとは全く別神なるべしされば其の名は國名と相關係し即ち國名は其神名より出でたるものにして人民は惣て此の神の臣下たり軍兵も總て此の神の軍兵なり而して國敵も亦神敵なりと考へられたり特に國王は神と最も密接の關係ありて神は之をして王位に登らしめ之を保護し國王軍に臨む時は之を導き其の子孫は亦之を愛護し玉ふ故に國王の戦争を起さんとする時は必ず此の神の名を以てし歸陣の時も亦神名を用ふるなりされば此の神を呼で之を諸神の父といふ尤も他の神にも此の神父名を用ふるなり其の形は人跡にして頭には角ある朝を被

り左右に羽翼を具ふ其の人跡なるは智を表し角あるは威を現はし羽翼も亦神の尊きことを示すものにして總て各格段の意義を表したるものなり又此の神は常に弓を手にして將さに矢を放たんとするか如きの狀を示せるものあり或は弓矢を持たざるものもあり即ち國王の軍に臨むときは弓矢を持し平和の時は弓矢を持たざるなりといふ

アッシュールに次ぐ所の神に三跡あり即ちアヌ(Anu)ベル(Bel)ヒ(He)是なり此の三神は獨り亞西里亞のみならず巴比倫にても亦之を用ふヒ(He)は巴比倫にてはカ(Ho)といふ亞西里亞中にては或は此の三神を以て最も尊貴なる神と稱する者もあるなり巴比倫にてはアヌとベルとは兄弟にして共にラーの子なりといふも亞西里亞にては此の二神に親戚上の關係あることを傳へず尤もカ(He)の神は兩國ともに之を親戚上の關係ありとせずといふ

此等のことは最古に屬することにして其の細事に至りては最も信用し難きもの多く學者の所説も亦一定せずといへども多少我が國の神代史等に比較するの亦幾多の興味なきにあらず吾人が宗教研究上に參考すべき材となることも亦尠か

比 較 宗 教 學

亞西里亞の三神に關し或る人は想像説をなして以爲へらく此の三神は實に世界開發の道理を表示したるものにして第一アヌー神は大初混沌の狀態を指し第二ヒール神は生命及び知力を表示し第三ベル神は万物を創造形成する所の靈に名けたる稱にして即ち此の靈力により混沌の物質次第に開發形成して其の秩序を持つ所に於て之を神に配當したるものなりと此の想像果して當れりや否や甚た疑ふべし若しこれをして眞ならしめば亞西里亞の宗教思想は極めて高尚なるものといはざるべからず然るにローリソン氏は亦説をなして曰くアヌー、ベル、ヒールの三神は地、水、天の三を表したるものなりこれ前者に比してはなほ頗る有形的にして或は眞に近きものならん乎蓋し此の地、水、天の三を以て神に配當することは希臘羅馬に於けるプルトリ、ズウス(即チポピター)、ポイサイド(即チプテュンの三を以て地、水、天に配したると全く同じきものなるべし亞西里亞人は此の三神を以て最初は全く之を箇々の三神として信じ居たりしも後に至りて其の思想を變じヒール神は水を支配し餘の二神は其の神固有の支配する所あることを忘れ二者共に世界全軀を支配するものなりと思はるゝに至れり故にアヌーとベルとは終に其の支配に區別なきものとなりしなり此のアヌーは亞西里亞人一般には之を最初の神となし世界の王にして且つ衆神の長なりと信じ居たるが如し然れども同國古記録中之を以て諸神の父等と記載せらるゝとはいへども之を以て未だ亞西里亞人が實際上獨立獨一の神を信じ居たるものとは見做し難きに似たり何となれば若しアヌーを以て果して獨立の一神となし居たるものならんには其の國王が此のアヌー神を外にして他の神を以て己れの守護神とし自己の記號となすことは解し難ければなり其の一宗教の性質を有せざることを見るべきなり次ぎにベル神は巴比倫亞西里亞の普通に信奉したる所にて從て又多くの殿堂を有せり巴比倫亞西里亞の神代史によるにベルを以て天地を創造したる神となし又神は自己の血液と土地とを以て禽獸を造り及び日月をも造りたりといへり加之若し神の戦争の事につきてはベル神は電光を放ちて大龍神の咽喉を貫き之を射殺したりといひ且つヒール神と結合して七惡神の來攻を防禦したることありといふ此等の故を以てベル神も亦諸神の王と尊ばれ諸神中の最高位を占めたり第三のヒール

比 較 宗 教 學

に世界全軀を支配するものなりと思はるゝに至れり故にアヌーとベルとは終に其の支配に區別なきものとなりしなり此のアヌーは亞西里亞人一般には之を最初の神となし世界の王にして且つ衆神の長なりと信じ居たるが如し然れども同國古記録中之を以て諸神の父等と記載せらるゝとはいへども之を以て未だ亞西里亞人が實際上獨立獨一の神を信じ居たるものとは見做し難きに似たり何となれば若しアヌーを以て果して獨立の一神となし居たるものならんには其の國王が此のアヌー神を外にして他の神を以て己れの守護神とし自己の記號となすことは解し難ければなり其の一宗教の性質を有せざることを見るべきなり次ぎにベル神は巴比倫亞西里亞の普通に信奉したる所にて從て又多くの殿堂を有せり巴比倫亞西里亞の神代史によるにベルを以て天地を創造したる神となし又神は自己の血液と土地とを以て禽獸を造り及び日月をも造りたりといへり加之若し神の戦争の事につきてはベル神は電光を放ちて大龍神の咽喉を貫き之を射殺したりといひ且つヒール神と結合して七惡神の來攻を防禦したることありといふ此等の故を以てベル神も亦諸神の王と尊ばれ諸神中の最高位を占めたり第三のヒール

(六四)
 は亞西里亞諸神中直ちにヘルの次位を取るものにして水を支配する所の神なるが故に海王河伯或は泉神等種々の名稱を以て呼ばるゝものなり今同國洪水談として傳ふる所によれば彼れは大洪水をくだして地上の人類を悉く滅殺せんと欲したり然れども唯或る一家族をして此の洪水を免れしめんと思惟し彼れは彼の家族に向て當さに大洪水の來るべきことを告知し教ふるに大舟を造りて之を免るべきの策を以てす其の難を免れ得たるものをハシス、アドラ(Hasis-adra)といふと是れ甚た彼の舊約全書の記する所に似たるものなり以上之を亞西里亞の三神となすなり

以上第一位の三神に次ぎて別に第二位の三神あり第一シン(Sin)即ち月神第二シアマス(Shamas)即ち日神第三ツール(Ti)即ち氣象の神是れなり巴比倫亞西里亞に於て常に斯の如く日神を以て月神の下に位せしむる所以は其の地熱帯にあるを以て晝間の酷熱に苦しみ夜月の清涼をこよなき樂とする者にして自から月を愛するに至りしものなりといふ故に之を呼ぶに亦諸神の神或は神の王等の名を以てし又之を建築を支配する神なりとし家屋城壁の神として之を崇拜せり蓋し此

の月神と他の二神即ち日神氣象神の三は互に同盟を形造れるものにして其むかし七惡神の月神を攻むるに當り他の二神力を合せて惡神を退かしめ以て月神を助けたることあり之を以て此三神は一團にして一神に祈願を籠むるときは三神に祈願すると同一の功德あるものなりとしたり然れども祭禮供養の時に於ては或はシンとシアマスとを一にしてヘルを別にする事あり此の三神中に在て巴比倫亞西里亞二國人の最も崇奉したるものは月神なること論なし此を以て月神には多くの殿堂あり毎年第三の月を以て之を祭るを例とすなほ此の國の王中には月を以て其の名に用ひたるもの多きを以ても其の當時最も信仰せられたることを推想すべし此の神の標章は常に新月を用ふるなり或は人跡を以て表示せらるゝことあるも其時は其人の頭上に新月を戴かしむるなり次ぎに第二位のシアマス即ち日神は天地の構造者或は天地の裁判官又は世界の軍師等の名を以て稱せられ其の他火神神光晝神等と呼ばるゝことあり亞西里亞國王は此神を以て戰陣に臨みて我を助くるものなりと信じ若し平和無事の日に於ては常に王に力を添へ臣下を制服し民心を支配するものなりとせらばたり毎年第七の月を以

て之れを祭る又或傳説に従ふときは彼の洪水を下したるは即ち此の神なりともいふ次に第三ハルス即ち氣象神は空氣、風、雨、雷、電、其の他凶作、飢饉等をつかさどる神なり閃々たる電光は彼の手にせる刀より發する所にして大風雨を起し飢饉を致す等總て此の神の所作なりとす其の他土地の豊饒も亦其の支配に屬す以上の八神の間階級の差あり此の八神に次ぎて六女神あり前二位の各三神と夫婦の關係あるものなり唯アッシュールとラーの二神は之れに對する女神なし總て東洋の神には夫婦の關係あるもの多し我が日本の神代説亦之に似たりアッシュール、ラーの二神の如きは我が天御中主神に比すべきもの歟アヌー神の妻たる女神は之をアナト(Anat)又はアナタ(Anata)といふ蓋しアヌーとアナトとは固と同語なり唯一神を二名とし男性女性を以て之を分ちたるに過ぎず次にベルに對するはヘラト又はヘルチスといふ母神或は歲神なりといへりローに對するはダウキナ(Dav-Kine)なりダウキナは下界の神にして此世界にありて人の死を支配する女王なりシンの妻神は別に名なし唯大令女と稱せらるるのみシアマスの妻神はクライ(Gala)ハルの妻神はシアラ(Shala)或はタラ(Tala)といふ以上六女神六男神其

(六七)

の配合の神なること知るべし

此の外なほ別に五神ありニニン(Nin)或はニニヤン(Ninip)は羅典希臘のサタルン神(Saturn)に當るニヤールメン(Marduk)は羅典希臘のジュピタル神(Jupiter)ニヤルガ(Nergal)は羅典希臘のマルス神(Mars)イシタール(Ishar)は羅典希臘のヴェニス神(Venus)五チボー(Nebo)は羅典希臘のメルクリウス神(Mercury)に當るなり此の中第一は惑星界の最も遠き處を支配する勇氣の神にして亞西里亞一般に信奉せられ第二は巴比倫にて最も尊崇する彼の太陽神なり第三は國王の他國を攻むるとき之を助くる所の軍神にして又大勇將とも呼び其の他國の事をも支配するなり第四は結婚の神戀の神にして或は戦争を支配する女神とも云ふ呼ぶに勝利の女王の名あり第五は智慧の神なりこれ人間の智及び教育を支配し又王に位を授くる神なりといふ或は曰く此の五神に又配耦神ありと云ふ然るに一般に亞西里亞人の信じたるは此の五神にして配耦神を信せず故に或は配耦神なしと説くものもあるなり

亞西里亞の宗教は巴比倫教と大同小異なり神に奉するに餘り大なる堂宇を建て

さるも高塔を築き神室を其の上に安んず神は總て金石を以て偶像を造り人形を
なす神を拜するには祈禱と供養とを用ふ祈禱には神前に其の罪を懺悔し其の助
を仰がんと願ひ供養には重もに牛羊を献じ禮拜の時は酒を供し香を焚くを常と
す又死後天堂地獄の説を信じ亡者の爲めに天堂に昇らんことを神に祈請するな
ら亡者の天堂にあるものは白衣を着し光明を發ち神前に侍し神饌を食すると雖
も地獄は之に反して暗黒なり此處に墮落するものは泥食すといふ罪の輕重によ
りて若に等差あり又火を以て罪人を苦むることは世界一般に等しき思想なり又
亡者は總て飛鳥の如く空中を飛行すといへり

神代に七惡神謀反してカヌー神を攻むることあり月日氣象の三神擊て之を破る
其後しばらく平和なりしといへども後復た天界五千の群勢一揆謀反をなすアル
神と戦ひしが終に天界を放逐して七惡神の居所に投せられ再び天界に來ると能
はざらしめたりと次に神人を造れり是より先神の世界か人間世界に先ちて社會
をなしと恰も今日の人間の社會と同様なりしといふ或る開闢説に曰く天地未
開の新世界未だ暗黒にして種々の妖怪其の中に棲息しオモルカ(Ornka)と稱す

る一女ありて之を支配したりしがヘル神之を二割して天地此に現出し妖怪等は
其の光明に堪へずして悉く遁逃し去りしかば神は則ち其の光りに堪ふべき人間
を造れりといふ

古代の宗教思想は東西相合するもの尠からず是れ決して妄りに放擲すべきもの
にはあらず我が日本の神話の如き或は怪誕取るに足らずとして顧みざる學者な
きにあらずといへどもこれ思はざるの甚しきものにして今日は之を比較的に研
究する必要を感ぜり以下印度教即ち婆羅門教を畧述すべし

第四講 婆羅門教 (印度教)

印度教は印度人一億七千万人の奉する所にして社會一切の儀式出産婚禮葬祭等
は皆其の宗に定めたる規則に従ふこれ實に印度の國教といふも不可なることな
かるべし何となれば印度上流の人即ち國政に關するものは皆此の教を奉すれば
なり此の教の立つる所の神甚だ多し故に外見上多神教に似たるか如しと雖も其
の内部の道理を考ふるときは實は凡神教に基つくものなり其の種々の神あるは
宇宙の形を偶像に現はし其の勢力を種々の方面より拜するものなり且つ吾人も

神の一部にして草木禽獸總て神の一部なる故に之を拜するは即ち神を拜するなりといふに歸す印度人中にても少しく智あるものは皆此の理を知れるなり又印度宗教に取りて一の要點とすべき所は吾人の感覺上に現はれたる所の諸現象を以て總て幻象なりとなすこと是なり現に佛教の如きも亦常に此の談あり印度の人種は決して一人族にあらず隨て國王と稱するものも印度全國を一統せるものにあらずされば一國々々各文明の程度に大なる異點あり宗教といへども亦印度全國を統一せりと稱すべき者はあることなし然れども中に於て婆羅門教は最も廣く此箇々の間に通じて統一の形をなしたる者なるべし既に斯の如く各國獨立して政治上の成立を異にし文明の程度、人種の性質も相異なるを以ての故に婆羅門教を以て宗教の主なる者となすと雖も人民の祭る所の神、儀式、堂宇等一々皆等しからず一家の神、一國の神、善神、惡神或は半人半神なるなど其他蠅を嫌ふ神、死を喜ぶ神等區々の神其の數殆んど無量なり今以下に述ぶる所は此等の中最も一般なるもの二三に過ぎず

印度教に於て人民の階級の嚴格なることは人の知る所にして所謂四姓の制と稱するもの是れなり第一は婆羅門(Brahmins)第二は刹帝利(Kshatriya)第三は吠舍(Vaisya)第四は首陀羅(Sudras)の四なり此の四段の階級はもと皆婆羅門教の經典より出でたる所にして婆羅門はブラマの口より生れ出でたる所の所謂僧侶の一族にして最高等の一族なり刹帝利はブラマの腕より生れ出でたるものにて即ち軍人なり次きは其の脛より生れ出でたる商人なり最後なるは足より生れ出でたる奴隸也とす中に於て婆羅門族は一切の教育より社會全般の冠婚葬祭の儀式を掌り且つ經典の講究を力むる者にて最も勢力あり加之最も智識ある族類なり之に反して首陀羅に至りては教育を受くることを許さず又財産を有すること能はず若し財産を蓄へたるときは婆羅門族が隨意に之を其手より收むるを以て至當の事なりとせらるゝなり然れども以上の區別は今日にありては最早種々の人種宗教の混入によりて昔の如く嚴然たること能はず唯舊格を存するものは獨り婆羅門族のみなりといふ

婆羅門教の經典を毘陀となす是ブラマ神の啓示を與ふる所なり毘陀に四あり第一

一、リグ・ヴェーダ (Rig Veda) 第二、ヤジュル・ヴェーダ (Yajur Veda) 第三、サーマ・ヴェーダ (Sama Veda) 第四

アサルベ昆陀 (Ashurva Veda) 是なり昆陀は獨り婆羅門教の經典たるのみにあらず
世界中最古の書にして又印度の開闢史なり此の經典中の神に三種あり

- 1. ブラマ (Brahma)
- 2. ヴィシュヌ (Vishnu)
- 3. シヴァ (Siva)

此の中第一のブラマを以て世界創造の神となす之につきては傳説極めて多く初
め混沌未分の際に於て其の形鶏卵の如し中にブラマ神あり默然として其の爲す
べき所を思考せしが一旦世界を造らんことを決心してブラマ(男性の神となり鶏
卵の狀を中分して天と地とを作り世界を造れりといふさればブラマは印度にて
は中性の語にて未だ陰陽男女の別なき其の作用を現せざる時を指し已に其作用
を現して世界創造に着手するに至りしときはブラマと變じたる後なりとする
なりブラマに次ぐをヴィシュヌ、シヴァの二神とす以上の三神に附屬せる神は其の數實
に夥しく凡そ三億に上れりといふものあり此の外には半神半人の神ありて其
數實は無量といふべきものなり

ブラマは世界創造の神なりといへども今日にては印度人の之を禮拜するもの甚

た少しこれ世界創造の事は時既に悠久に屬し之を知ること能はざるのみならず
創造の事終れば最早今日の我等に直接の關係あるとなしといふにあり之に反し
てヴィシュヌとシヴァは之を奉ずるもの甚た多しヴィシュヌは守護神にして最も我等に密
接なり此の神の妻として傳へらるゝものはラクシミー (Lakshmi) なり繁盛豊富を主
どるといふヴィシュヌは平生眠息の態にあり(印度にて一般に寂然靜息の態を以て最
も尊嚴なるものとす)人又は他の神にして之に祈誓する所あるときは其のこゝ
ろヴィシュヌ神に感通してヴィシュヌは眠息より起きて下界に來り救助を行ふものとす
且つ此の神に關して最も特異の點と稱すべきものは其の種々の身を化現して(所
謂化身種々の神の作用を示すにあり其の化身神の主なるものはラーナ (Rama) ク
リシュナー (Krishna) の二神となす此の神は印度の神中最も重なる者の中に數へ
らるゝ者なりと雖ども實はヴィシュヌの化身なりと云ふ蓋し此の化身化現のことは
印度人が古來より有したる一種の思想にして佛教の如きも亦此の說をなす彼の
觀音の化身の說の如き最も著しきものなりこは一神教の眼より見れば極めて怪
しむべく笑ふべきに似たるものありといへども凡神教の主義よりいはいはゞ万有一

切皆神の義なるか故に其の本體既に神なりとせば鳥獸魚蟲皆之を神の化現として拜するとも固より當然なるものなり或は曰く古代印度の一部に於て山林の間に棲息せる野蠻人ありて鳥獸魚蟲等を禮拜したりしが之を婆羅門教に誘入せんかために野蠻人の禮拜する所の動物等を以て皆我がヴィシヌ神の化現なりと説きて以て其方便となしたるものなりと次にシヴァはヴィシヌに反對して生滅を主宰する所の神なるか故に人類の生殺其の他一切の天變地異等の如きも總て其の手中にあり此の神はヴィシヌの如く多くの化身を現ずることはなしといへども種々の偶像を造りて拜せらる此の神には熱心なる信者甚だ多く其の目的は神の心を和らげて其の害を避けんと願ひ或は之に祈願するときには神力我に感通して能く鬼神惡魔を使役するに至ると信せらるゝによらざれば此の信者中には好んで自ら其の身を傷け或は斷食等非常の患難苦行をなして其の神力を己れに得んことを願ふものあり

以上に述べ來りし所の三神は所謂印度の三大神と稱すべきものにして苟くも印度人たるものは皆之を奉ぜずといふことなしなほ此の外に各地方には其の地方

の神ありて其の數無量なることは已に述べたるが如し扱て印度に於ける此の三神の上に就きては其の意味に内外二面の別あることを知らざるべからず即ち外面の意味より云ふときは此の三神各別獨立の神にして個々の三神なりといへども若し内面の意味より之を見るときは三神實は一體の神にして即ち三位一體の神となるなり且つ印度に於ける此の神に關する思想は頗ぶる高尚なるものと最下等なるものとを結合して成立したるものにして若し其の下等なる點より見るときは或は偶像を拜し或は化身として禽獸草木を拜するか如き皆是れ野蠻の宗教たる拜物教と毫も異なるとなきものなり然れども翻て他の高等なる點より考察するときには偶像の如き有形の物體の如きは總て神の思想を寄する所にして實は宇宙の大勢力なる凡神を拜する宗教と謂はざるべからず故に印度教は一方よりは凡神教なり他方よりは多神教或は拜物教なり之を要するに風吹き雨降り草は青く樹は緑りなるは皆此の大勢力の發動なることを認得するより拜物の思想を形成せるを以て高等なる思想と下等なる思想との結合したるかため或は感稱すべき凡神の説あり或は排斥すべき拜物の觀あるものとなりしなりしかも之

かため却て下等人民も之を奉じて利益あるべく高等人種も之を信じて安心するを得るはこれ實に印度教の特色特性なりといふべし西洋にても耶蘇教以前の宗教には或は今日より見て宇宙の大勢力を觀したる凡神的思想なきにあらずといへどもそれは到底印度教の如き明瞭にして且つ深遠なる凡神論に比すべくもあらず佛教の如きも亦此の印度教の特色を有するものにして一方よりは極めて高尚なる理想教にして而かも一方には偶像教拜物教の形を有す此を以て能く高等なる思想に適し又下等なる信仰に適す耶蘇教が一神を擁立して到底他の宗教と相容るゝこと能はざるか如き類ひにあらざることを知るべし次に印度教の特質とすべきものは三位一體の説是なりブラムの原始神開きて三神となり三神更に開きて幾百千の多神となるも畢竟皆ブラムの一體に歸着せずといふことなく佛教にも法報應三身一體の説あるも蓋し此の理に外ならず唯婆羅門教は之を神の下に説き佛教は更に進んで之れを理想の上に説くの別あるのみ然るに比較宗教の未だ開けざる以前にありて印度教の未だ歐洲人の知る所とならざりしに當ては耶蘇教は自ら其の三位一體説を以て自教の特色なりと誇稱し居たり曰く神

子は神と人との間に立ち其の媒介となり愛を以て神人を結合するを得然れども他教は即ち然らず神と人と隔歴して存すとされど此の迷謬は今や最早其の跡なく反て耶蘇教の三位一體説は或は印度教より發する所にあらざるかを想はしむるに至る加之希臘のプラトールが理想と万有との間に精靈を立て、三位一體を説きしことあるを見ればこれまた耶蘇教の三位一體説の源となりしものならん兎に角印度教の説多少耶蘇教に入りたる蓋し全く所由なきにあらざるべし右三大神の外なる所謂地方神中には或は三大神に關係あるものあり或は全く之に關係なきものあり又或る有形物に關する神即ち風の神雨の神等のみならず形骸なきものにて之に關する神あることを見る運命の神勇氣の神戦争の神の如き是なり(我が國の七福神の如きは運命の神なり)又日月山川草木を拜する(即ち拜物教)あり徳者智者勇者等の死せる靈を神として拜するあり且つ此の死人の靈は生時と同じく人事の上に力あるものと信せらる我が國にも天神地神人神の三區別あるべし其の八神とは人の生前の徳を慕ひて死後其靈を祭るものなり(又奇草異木珍石等の物神を神として拜するあり)支那人は最も此の風あり然れども支那

人は神の思想甚た少く寧ろ人の上に就きて考ふること多し例へば奇草異木の類といへども之を以て神の啓示とするよりは之を天の人に警告する所として或は祥瑞といひ凶徴といひ以て人の行爲を戒むるなりこれ支那に於ける一種の宗教思想といふべし又我國にても老樹に神繩を張ることあるは草木を神とするものなり或は人に必用の動物若しくは有益の貿易品を神として祭ることあり(我國にては温泉場には必ず温泉の神あるは此類なるべし)又各職業各階級につきて其の職業其階級を監督する神あり(我國にても大工は聖徳太子を祭り醫者は神農を祭る其の他印度人は仙人行者を尊崇すること最も甚たし畢竟此等各地方幾多の神なるものは如何なる思想より生じ來りしものなるやを研究するは實に宗教學上必要なることなるべし一説によるときは印度に於ける此等の諸神は皆人間より出でたりと即ち人の死後其の亡靈を拜するもの歳を経るに隨ひ次第に轉じて其人たりし性質は忘却せられ終に全く神として信せらるゝに至るこれ即ち地方神の由て起る所なりと云ふ然れども印度宗教全軌の上より之を考ふるに此の説未だ甚だ妥當なりといふべからず何となれば若し地方神を以て總て人間より出で

たりとせば先づ彼の三大神の人間より出でたることを證せざるべからざるを見ればなり然れどもこれ到底能くし得る所にあらず然らば地方神の思想先づ世に發達して然る後三大神印度に起れりとせんかさりながら此の三大神の思想は人の知るか如く世界中極めて最古の説にして地方神の後に起りしものなりとは見ること能はざるものゝ如し特に地方神中の拜物教の形あるものに至りては決して人間より出でしものとはいふべからず(尤も中には人間より起りしものもあるべし)此に於て乎印度宗教思想の起原に關しては經驗派非經驗派二種の説を参照するの要を見る經驗派の説に従ふときは曰く凡そ宗教なるもの疑念と恐怖心と及び利己心との結合より成立したるものにして太古の蠻人か天變地異の變象に接し疑念を起し之を避けんとするも到底自己の意に任せざるを見て不可思議の思ひをなし神の思想を生ずるに至り此の不可思議の力に向て祈願するときは其の天變地異を止むることを得ること恰かも人間の強者か弱者の地に伏して懇願するときは之に暴力を加へざると一般なるものとするに至れりと或は曰く既に此に不可思議てふ思想の生ずるに及びては隨て人力以外の力を想像するは經

驗上固より然るとなりと兎に角此等の點よりして神の考を生じて多神教を生じ
 以後人智少しく進み内省して心なるものゝ存在を知り所謂身心二元の思想を生
 ずるに及びては死後の精神靈魂等の考を生じ靈魂世界も現世界の如く支配者被
 支配者の別あり善悪強弱の別あることを想像しこれより更に動物の靈魂一層進
 んでは植物の靈魂より山岳河流の靈魂までも亦同様のものなりと信じ終に種々
 雑多の神を生ずるに至るなり然るに此に人間には所謂利己心主我心と稱するも
 のありて各人の奉ずる神の中につきても各自己の奉ずる神を以て無上のものと
 執し互に執するの結果甲(强者)の奉ずる神は上に位し乙(弱者)の神は下に伏せられ
 て漸く一神の域に發達するものなりと此等經驗派の説に反對して其の論をなす
 もの之を非經驗派のなす曰く經驗派のいふ所は一神は多神より進み無形は有形
 より發達せりといふものにして人智の進歩は固より然るべしと雖も表面上單純
 にさる順序を取るものはあらずして裏面になほ一種言ふべからざる万有の不可
 思議靈妙の大勢力換言すれば無限の存在を感得して尊敬の念を惹起し其の催起
 する所となりて最も感覺に觸れ易き日月星辰等によりて其の思想を發表するも

の是れ宗教にして獨り日月星辰を疑ひ之を恐るといふのみに歸すべきものには
 あらず即ち人間には本然に宗教心を包有するものなりといふにあるなり而して
 今印度教は實に此の非經驗派の所説を證明するものなり即ち彼の三大神の如き
 なほ其の原始プラムの一神の如きは太古より今日迄傳ふる所にして決して經驗
 派のいふか如き多神より發達したるものにはあらずして初めより最大至高の大
 勢力は雜然たる宇宙を活動せしむることを認得し居たりしものゝ如し(假令和め
 より完全なる凡神教の思想の開現せざりしにもせよ)天地の創造三大神等深妙の
 説は蓋し皆之より生れ出で來りしものなりこれ畢竟人に本來宗教心の存するこ
 とを證明すといふの外なかるべし思ふに印度教の性質が漸く歐人の知る所とな
 りてより以來は非常に好材料を彼等に與へ彼等の宗教思想の上に大變動を與へ
 しこと蓋し疑なきなり

婆羅門教が現時印度にありて盛に行はるゝは論なし且つ益其の信者を増加する
 の傾向を示せりこれ同國の僻隅山間の地に居住する下等人民が年一年漸々に婆
 羅門に變宗するによる隨て此等の人民は其の衣食風俗習慣より精神に及ぶまで

次第に婆羅門教に化するの勢あるものゝ如し
 印度人の婆羅門教を信するは其の意決して神によりて幸福を求めんとするが如
 き普通の人情に同じからず又未來の福果を希ふといふも耶蘇教徒か神の愛を望
 むか如きとは等しきものにあらざ婆羅門教は輪廻轉生の説を唱ふるものにして
 現世の善行惡行の因は未來之に適應すべき貴賤上下等の苦樂の果を招く者と信
 じ而して其教徒が最後の目的とする所は不生不滅の彼岸に到着せんとするにあ
 り(此等總て佛教の所談と甚だ相類すると知るべし)又婆羅門教によれば吾人人類
 は元來自由の境界に逍遙するものなりと雖も一たひ形骸を固結するに及び感覺
 上の慾念に束縛せられ一死生をかふるに至りてもなほ精神の自由は未だ免るゝ
 によしなく來世更に前世の業因に適應したる形骸を取りて苦樂せざるべからず
 而して吾人の目的とするは即ち此の苦樂浮沈の境を目して自由の妙界に遊ぶに
 ありといふこれ頗る希臘ピタゴラスの説く所と相類するものなり又此の教の佛
 教と等しき所は感覺上の世界差別の現象を以て幻妄なるものとなし差別の迷界
 に執着するの念を離れんとするにあり又兩教共に輪廻轉生の説を唱へ善惡の業

共に精神に薰習して滅せず未來更に一生を形成するものとなすなり
 之を要するに婆羅門教は天地創造の一神を設くこれ一神教なり然るに其表面上
 無數の諸神を立て、之を禮拜するはこれ多神教なり而して一神と多神の關係を
 説くに至てはこれ凡神教なり此くの如く三種の旨趣相融合して所謂婆羅門教を
 なすものなれば婆羅門教は能く上下の共に信ずるを得る所にしてこれ實に印度
 教の特色なり

凡そ印度の學問は常に安心立命てふ小宗教的思想と相離るゝとなし希臘の學
 問は眞理を目的として之を研究したりしも印度にありては眞理の外に別に吾人
 精神の安慰せんことを目的とせり支那はなほ一種特殊の學問を有し常に治國平
 天下の考を以て本としたり高尙なる易理も畢竟は此の用に充てんがために説か
 れたるものなるにて知るべし即ち希臘は最も學術的なるもの印度は最も宗教的
 なるもの支那は最も政治的なるものゝ區別あり此等の異點は果して何によりて
 來る所なるか皆共に學者の考究を要する題目なるべし

歐米人は耶蘇教の外に宗教あるとを知らず唯神命を尊ぶを以て唯一の目的なり

と信ぜり而して婆羅門教を難するもの曰く婆羅門教の輪廻説は個人の自利を目的とするものにして苦樂の報は唯自己によるとするものなるが故に賞罰の權を神に歸し吾人の道德を制裁するの耶蘇教に比しては其の力甚だ薄弱なるものなり故に道德を講ずるは獨り耶蘇教によるの外なしと又曰く印度教は總て厭世的の傾向あり然れども世界は神の自ら創造したるものなれば吾人豈に之を厭離する理あらんや四海兄弟共に心を一にして神命に従ひ命のある所を樂むべしと此理によりて佛教までも之を難せんとせり

婆羅門教と佛教の頗る相類似するあるは論なし婆羅門教は佛教の以前より既に存在し佛教は婆羅門教より發達して之に反對したるものなり然して婆羅門教は亦此の反對によりて一段の進歩を致したるなるべし、夫れも同じく印度に起れるものなるか故に其の間自ら相似の點を見ること恰かも儒教と道教と相反して夫れかも支那特殊の風を合むか如し佛教の婆羅門教に對して第一に反對したるは天地創造説なり佛教の説く所は万有恒有説にして創造説にあらざ恒有の諸法が因縁によりて生滅すとして所謂因縁教を成立したるなり佛教はなほ儀式上社會上

にも一大改良を起さんとし即ち四姓の階級をも之を打破して人民に自由を與へたり以て佛教か婆羅門教に異なる所以の一端を見るべし

第五講 比耳士亞教 (Parseism)

パーシーズム即ち比耳士亞教は比耳士亞人の奉ずる所の宗教にして亦之をゾロアスタニズム (Zoroastrianism) ともし、又其の宗徒は火を拜するを以て火教の名あり其の經文はゼンドアヴェスター (Zend Avesta) 或は單にアヴェスターと呼びゼンド語 (比耳士亞の古語) を以て記されたり其教祖をゾロアスターと (Zoroaster) といふ抑もゾロアスター氏の此の世に在りしは何年代にてありしか諸説紛々未だ之を確知すること能はず或はトロヤアの戦争より五千年以前の人なりといひ(即ち紀元前六千三百年今より凡そ八千餘年前)或は紀元前二千二百年前の人なりといひ(而して氏はペロポネを支配したりしことありと)又一説には紀元前五百五十年といひ他の一説には紀元前六七百年ともいひ又は紀元前千二百年又はフラトール氏より前六千年又はアラハムと同時代(即ち紀元前千二百年)又は紀元前一千年又は紀元前二千二百三十四年等其の他異説甚だ多し然れども紀元前六千年とい

(八六)

ふか如きは古傳にして今信ずるに足らざるべし思ふに紀元前六七百年(即ち孔子と同時代)頃の人ならんか或は釋迦と同時の人なりとの説をなすものもあり釋迦佛出世の年代は西洋説にては孔子と同時なりとなす果して然らば孔子釋迦及びゾロアスターの三聖同時に此の東洋の天地に降生して各其の教を説きたるもの蓋し亦奇なりと謂ふべしゾロアスターの生地に関して其の説亦定かならず一説にはバクトリア(Bactria)なりといふ父はポラシニアスパー(Pourushaspa)といひ母をダクダー(Dakda)と稱す其の先は王族なりしも氏の生時は其の家甚だ貧なりき然れども氏の生前其母は胎内の見の必ず一大豪傑なるべきことを豫言したりといふ年三十にして以蘭に赴き沙漠中に住すること二十年間其の間巴比倫人に理學を教へ希臘のピタゴラスも亦其の教を受けたりといふピタゴラスの巴比倫に遊びしこと古傳に見えたりと雖もゾロアスターの教を受けたりと云ふか如きは固より信む難し氏は又天文學者にして且つ魔術家なりともいへり或は曰くゾロアスターは必ずしも一人なるにあらず同名の人甚だ多しこれ其の年代種々の異を見る所以なりと

是より其教の大意を考ふるに初め善神オルムツ(Ormuz)悪神アーマン(Ahriman)の二神あり一日善神オルムツは夢にゾロアスターに現じ告げて曰く我が光明は今諸光明の中に潜伏せり汝等若し其面を此の光明の方に向けしめ我が命を奉ずるときは悪神アーマンは直ちに遁がれ去るべしと此の神告は即ち波耳士亞教の起原にして其の所謂オルムツとは光明の神即ち善神アーマンとは暗黒の神即ち悪神なり而して此の二神は永久相争鬪して止むときなしと云ふ恰かも埃及に於けるオシリスの説と相似たり所依の經アベスター(智識の義)は決して一人一代の作にあらず蓋し種々の部分を後人の結集によりて一書となされたるものならん今ゾロアスターの筆に成りしものは果して何れの部分なるかは固より知るに由なし

此の教は早くより既に希臘に知られしといふ今其説によれば希臘人か火教に對する思想即ちゾロアスターは如何なる人にして如何なることをなしたる人なるか等の考をも附したりプラトンの記する所によれば氏は實にオルムツの子なりといひ或は氏は神火を執りて天より降下したるものなりともいへり今日印度

ボンペイ府に火教信者の一部落をなすあり其事は後に述べべし
 佛國人アンケテル、チーヘロンと名くるもの波耳士亞、亞刺比亞等の語を修め後軍
 兵となりて印度に至り火教徒に隨うて其の教義を學び遂にアベスターを得て之
 を譯するに至れりこれ實に火教の歐洲に知られたる初めとなす蓋し此の教は佛
 教と同じく印度教に反對して宗教改良の目的を以て世に起りしは疑ふべからざ
 るものゝ如し而して佛教は哲理を本とし火教は倫理を本とせりといふ或は佛教
 は慈悲を本とし火教は正義を本とし火教は眞實勤勉、正理の教を説き釋迦は仁慈
 博愛、智光の教を説くといふ又火教は二元論なれども佛教は一元論なり火教は万
 物の創造主を説けども佛教は因縁和合を説く等の別あるなり
 火教の神は光明の神にして道理上最も純然たるものなり且つ他宗教の如く之に
 附屬せる多神を取らず唯専ら一神を奉ず而して此の一神には六性を具するとな
 す(一)愛 (二)惠 (三)力とは愛と惠とを結合し之を實行するの力なり(四)敬信 (五)
 幸福 (六)不死 即ち是れなりされば此の教の奉する所は此の六性を具有せる道
 理上道德上純然たる光明の一神にして更に之に附隨したる神を拜せざるなり之
 に反して立つる所の惡神も唯一の惡神にして此の惡や實に事物一切に固有なる
 ものなりとなすこれ其の善惡二元の説たる所以なり且つ此の二元や其の間には
 争鬭常に絶ゆることなく所謂世界の現象とは即ち此の二元争鬭の形狀是なりと
 いふ是れ他の二元論と頗る其の趣きを異にする所なりされば吾人人間の此の世
 に處するや其の目的とする所は唯善を助けて惡を排するにあり吾人は心中の惡
 念と争鬭せざるべからず惡念伏するときは即ち善生ずべしと火教道德説の起る
 所蓋し此くの如し故に火教は二元論にして善惡並存を説けども佛教は唯心的
 一元論にして善惡無差別の説なれば善といひ惡といひ固より妄念に過ぎず若し悟
 りて一元を證得すれば善惡本來空なり是れ佛教の哲理を本とする所以なり故に
 佛教は内に省して妄念を靜止せんとし火教は外に對して惡元と闘はんとすこれ
 兩者の別なるべし又九章陀教と火教との差異は九章陀教は創造の一神を立て所謂
 一神教なれども其裏面には万有神教の理を具す而して歸する所は一元論にして
 火教の二元論と同じからず或は曰く火教にも亦オルムツ、アーツマン二神を生じ
 たる一層其上に位する一元の説ありと然れどもこれ恐くは火教が印度教と關係

に反して立つる所の惡神も唯一の惡神にして此の惡や實に事物一切に固有なる
 ものなりとなすこれ其の善惡二元の説たる所以なり且つ此の二元や其の間には
 争鬭常に絶ゆることなく所謂世界の現象とは即ち此の二元争鬭の形狀是なりと
 いふ是れ他の二元論と頗る其の趣きを異にする所なりされば吾人人間の此の世
 に處するや其の目的とする所は唯善を助けて惡を排するにあり吾人は心中の惡
 念と争鬭せざるべからず惡念伏するときは即ち善生ずべしと火教道德説の起る
 所蓋し此くの如し故に火教は二元論にして善惡並存を説けども佛教は唯心的
 一元論にして善惡無差別の説なれば善といひ惡といひ固より妄念に過ぎず若し悟
 りて一元を證得すれば善惡本來空なり是れ佛教の哲理を本とする所以なり故に
 佛教は内に省して妄念を靜止せんとし火教は外に對して惡元と闘はんとすこれ
 兩者の別なるべし又九章陀教と火教との差異は九章陀教は創造の一神を立て所謂
 一神教なれども其裏面には万有神教の理を具す而して歸する所は一元論にして
 火教の二元論と同じからず或は曰く火教にも亦オルムツ、アーツマン二神を生じ
 たる一層其上に位する一元の説ありと然れどもこれ恐くは火教が印度教と關係

して後に生じたる所にして火教本來の旨にはあらざるべし次に火教と猶太教との間には甚だ類似せる所ありこれ畢竟猶太と火教の本國とは土地相距ること甚しからざるの致す所にしてゾロアスターのアブラハムと會見したることありとの傳説すら世に存する程なれば多少相影響したりしことあるを想するに足るべし

波耳士亞に於ける火教はマホメット教徒侵入の際多くは其の虐待に堪へずして或はマホメットに轉宗したるもあり或は殺害せられたるものも夥多なりき而して少數の徒印度ボンベイ地方に逃れて其厄を免れ此に一部落を成したり是より先き希臘アレキサンドルの波耳士亞征服の當時火教既に盛に人民に奉せられ居たりしがアレキサンドルの政畧は此教までも之を一變してすべて希臘風に化せんとせしを以て彼耳士亞人の悦服を得ると能はず然るにアルヂシル、バベザン (Arde-shir Babazan) 氏の再興となりて火教も亦波耳士亞の國教に復したれども終にマホメット教徒のために壓伏せられ其少數信者の遁れて印度に入りしもの其所持せる武器を捨て衣服を印度風に改め牝牛を殺すことを廢する等の契約の下に繼に

居住を許されたり今日印度に於ける火教徒は總て八万五千三百九十七人(一千八百八十一年の調査)にして其中ボンベイ居住の信者は七万三千九百七十三人なり其の信徒の數印度諸宗教中第八に位するものといふ即ち第一は婆羅門教にして其の信徒の數一億八千九百万人第二はマホメット教信徒凡そ五千万人次ぎは元始教印度古代よりの土人教次ぎは佛教なり佛教信徒は總て三百万人と稱す英領ヒルマ最も盛なり之に次くものは耶蘇教となす信徒凡そ百八十万火教徒は昔ボンベイを以て其の中心となすといへども前述の制限其の他種々の事情によりて言語は漸次に變じて印度語となり信者も多くは其固有の字義文義を解することなく唯其の僧侶たるもののみ家傳として讀經解義をなし得るに過ぎず然れども猶は未だ其の結合を破るに至らず實にこれ宗教の人心を結合する方に富めるによる然れども多年印度人と雜居するの結果自然に雜婚するものも出て來り終には相混じて始んと別なきに至るべし今日にても或は婆羅門教の寺院寺僧に供養し若しくはマホメット教徒の寺院等にも供養して敢て怪まざるものありといふされど其宗固有の唯一の善神は嘗て之を忘れざるなり且つ其の教本來の一夫一婦の

比 較 宗 教 學

主義の如きも堅く之を守り決してマホメト教の如き一夫多妻を許さずといふ
 然るに近來英政府の印度を領有するに至り却て其徒を保護し之に自由を與へて
 從來の制限を解きたるより頗に發達進歩の状態を呈し自國固有の言語により教
 理の研究を始め加之耶蘇教の入り來りて之れを自教に誘入せんとし遂に二名の
 改宗者を生したるより其の反動として火教徒大に奮起し互ひに相固結し力を戮
 せて之か防禦に當り或は雜誌を發行して進んでは耶蘇教の教義を駁し退ては自
 教の精神を示さんことを努め一千八百五十一年より毎週刊行の新聞を起すに至
 れり此等の影響により教育學問の道も亦頗る發達し風俗の改良上にも少からざ
 る變動を與へ第一に此改良によりて大に婦人の位置を高むるに至れり固より此
 の教は婦人を卑めたるものにてはあらず回教印度教の影響により漸次に男尊女
 卑の風をなすに至りしものにしてソロフスターの如きは既に夫婦一心互に真正
 なる道理に隨ひ和合親睦以て幸福を完うすべきを説き一夫一婦男女同權の旨を
 主張したり故に今日の風俗改良上の事の如きは唯火教の復古主張といふべきも
 のなり然るに此一大改革の結果として其内部に老人輩の守舊的人と青年輩の

比 較 宗 教 學

改進的人との間に衝突を來し恰かも我が國維新前後の状態の如くたることあ
 りしも時勢の力は之を如何ともするによしなく青年輩の主義は全く其の効を奏
 することを得たり
 火教徒は火を禮拜するは其の教には缺くべからざる儀式なり故に其の有様拜物
 教に近きものといはざるべからず然れども固より野蠻人の拜物と其の意義同じ
 からず今教徒の説を聞くに曰く我が火を拜するは火其物を拜するにはあらず唯
 火を以て光明の表章とし即ち神を代表するものとして之を拜するのみと又此の
 教の風として總て美麗なるもの及び有用なるものとは皆善神の所造となして之
 を尊崇するを以て火の如き赫々たる光明の如きも善神オルムツを代表して之を
 拜するならん且彼の教徒は徳義を守ること極めて嚴にして善神は吾人に光明と
 勞働とを與へ惡神は唯暗黒と睡眠とを與ふと信じ善神の命令に従順ならんかた
 めに僧侶は皆夜半に起き俗人は雞鳴に起き衣服を更め洗手漱口火を燒きて之を
 拜し祈禱をなす其の他定時の祈禱あり禮拜も毎日時を定めて太陽を拜し或は月
 及火を拜せり總て人の義務に背反し法を犯したるものは罪に處し改悟懺悔する

ものは善人に復することを得るものとして之を許すなほ他教の如く地獄極樂の談ありといへども大同小異なれば今は之を畧す

第六講 希臘古教

今日の所謂希臘教とは耶蘇教の一派にして羅馬法王の管轄を離れてコンスタンチノールを中心として東方に獨立したるもの是れなり今述べんとする所は此の教を指すにあらず古代希臘國に行はれたる一種の宗教にして其の當時盛行はれたる有様は大聖ソクラテスが此の信徒のため異端と目せられ終に毒殺の罪に處せられたるを以ても推知することを得べきなり

希臘人は印度人と同くアリアン人種の一分派なり然れども印度人等とは自ら其の特質を異にして希臘には自ら希臘の特質あることを見る其の文明の性質政治學術宗教に於て皆然らざるはなし例へば政治上に於ては希臘は古より自由共和的に人民の權利の思想大に發達したりと雖も東洋は主もに君主專制の風を存したり之を學問上に就て考ふるに東洋にても印度の如きは最も古くより學問の盛に開けたる地なりしと雖も其の學多くは無形精神上の談にして結果は之を宗教

上に應用し吾人の安心立命の資とするにあり希臘に於ては縱令無形精神上の哲學も嘗て之を以て宗教の資となさんとはせず學術は學術其物のために之を研究したりしなり(支那にては學問の結果は總て之を政治の料とし治國平天下の道を講ずるかために學問を研究したり印度人は宗教に應用して安心立命を目的としたり印度の哲學は應用哲學なり希臘の哲學は純然たる哲學なり以て東西學問の異同を知るべし)固より希臘の學術思想は單獨に成立したるものにはあらず亞細亞亞非利加の思想の混入し來り異分子結合の結果として大に其の發達を見るに至りしものなることは疑を容るべからず即ち希臘は地中海中に突出せる半島國にして直ちに亞細亞亞非利加の二大洲に近接せるを以て能く其の文明を輸入し得たるは勿論なるべしといへどもしかも亦自ら希臘固有の特質を失ふことなかりしなり隨て其の宗教の如きも亦大に一種の性質を具有することを知るを得べし

希臘の最初は紀元前二千年の當時アリアン人中の一派ペラスチー(Pelasgi)と名くる種族此の地に殖民したるを以て第一とすべし此の種族は決して最下等の蒙昧

なる蠻族にてはあらざりき此の人種の在住せしと及び其の耕作建築等をなしたりしことは今日存する所の遺碑等に徴して之を知るを得其の後同じくギリヤ人の一種族ヘレンス(Hellenes)此の地に遷りペラスシーを放逐して此に繁殖し終に今日の希臘人の祖先となれり然れども當時未だ歴史と稱すべきものなく唯口碑により傳へられたる美しき妄談(Myth)即ち神話(Mythology)を有し居たり詩人ホーマーの「イリアッド」「オデッセー」の二篇によりて之を知ることを得べし希臘古代の宗教とは即ち此の神話より成立せるものなりしなり

古代希臘教は全く一神的思想を含まざる純然たる多神教なり世界は太初極めて不完全不十分なる元質に大勢力の加はるありて形成したる所なりとなし嘗て一神の意匠的創造の如き考なし

此の世界は分ちて之を三部となす天上地若くは海及び地下是なり此の三部は各神ありて之を支配せり就中重なるもの三あり即ち第一エラナス(Uranus)第二クロノス(Chronos)第三ザエウス(Zeus)即ちジュピター(Jupiter)是なり此の三神は親子の關係を有するものにしてエラナスは親なりクロノスは子にしてザエウスは又其子なり

りしかも父子互に相叛きて終に其の國土を奪うて之を領するに至りしものなりといふ此の中第一第二の神は人之を祭るものなしと雖も第三の神ザエウスは宮殿を建て、皆之を信奉せり

希臘の開闢談は詩人ヘシオド(Hesiod)の詩中に記する所稍詳なれば今之に據るに世界は太初唯無限の空間の中に混沌たる状をなしやかて其中より大地を成したる者にして地は平圓其形盆の如し上なるは天といひ中なるは地といひ地下は暗黒なる夜國なりとす地の周圍は水を以て圍繞せらる此天地の結合によりて其間に万物の形成を見るとなす但し万物形成の點に於ては希臘人は諸神を想像し神力によりて此の事業の成就されたる者と信ぜり而して諸神の天祖をエラナスとし其妻をゲー(Gaea)といふ是れ即ち陰陽の二神なり此二神より六神子を生ず即ち

- 一 オセアナス(Oceanus) | 二 ユピター(Jupiter)
- 三 クロノス(前神の二) | 四 コウス(Coeus)
- 五 クリウス(Crius) | 六 ハイペリオン(Hyperion)

此の六神中前三神は最も有名の神にして第一オセアナスは大河神なり即ち世界

の海陸を圍繞する所の大河(大河ありて世界を繞り海洋の外圍をなすとは希臘人の考也)の神にして陸内に在る所の河流は總て此の神の子なりとなす此の子は其性極めて温和にして争闘を好まざるものなり第二のツヒタス(是れはツヒター神にあらず)に三子あり

(九八)

(一) アラス(Alas)(二) プロメシウス(Prometheus)(三) エペメシウス(Epemetheus)是なり此等の神には別に記すべき程の事柄なし第三のクロノスは父神の領地を奪ひたるものにして之をサタルン(Saturn)といひ極めて狡猾の神なり初めユラナス其の謀反を恐れて之を彼國に追ふ然るに母神ケイ之を悲み利刀を與へて父神を殺さしむクロノス則ち父神の睡眠に乗じ之を斬る其流出せる生血化して怪物となれりといふ此に於てクロノスはユラナスに代り其の妹レー(Rea)を妻とし子五人を擧ぐ

(一) ヘスチア即ちベスター(Hestia or Vesta)(二) ヴェスター即ちゼルク(Demeter or Ceres)(三) ハロー即ちジュノー(Hero or Juno)(四) プルター即ちプルトー(Pluton or Pluto)(五) エサイド即ちポセイドン(Poseidon or Neptune)是なり然るにユラナスは此の五子に其父クロノスの惡逆を告げ之を殺さんことを勧めしかばクロノス早く禍の其身に及ばん

ことを知り終に其の五子を吞却せり次て其の妻第六子を擧ぐツヒス即ちツヒタ

一と名つく母また父神の吞む所となるを恐れ其子の衣服を以て石を包み形を其子に擬似せしむクロノス來て之を吞むツヒス爲に免るゝとを得たり長じて其五兄を吞みたる父親を殺さんとを謀る時にオシヤナスの娘メチス(Metis)後にツヒスの妻となれり之れをクロノスに告げ吐石劑を與へて先づ石を吐かしむ依て五子を其の前に吞みし順序を以て之を口外に出さしめたりといふ是等の怪談は甚た奇にして抱腹に堪へざるものゝ如しといへども想ふに説の由來する所多少の理由なきにはあらざるべし或は曰くクロノスとは所謂時間を表したるの名にして五子を吞みしは年月日時の間の中にありて経過し去るの謂なる歟更に之を吐きしは年月日時の一ひ極りて再び初めの年月日時に還るの謂にして吞吐を以て四時の循環を示したるものにはあらざる歟と或は然らん

クロノスの時代は神代中に於ける黄金世界にして不老時代とも名つくべき時なりしなり其の死時に於ても尙ほ少壯時の状態を失はず僅かに安眠に於けるの有り様をなし而かも其の精神は不可見世界に入りて永く人間を守護するの地位に立

(九九)

てり此の黄金の時代を記念せんかために後代迄十二月中旬サタルン祭と名くる大記念祭を舉行し人民は皆業を止めて豪飲大食歡樂を極めて以て此の日を祝するとなり當日に限りて處刑を行はず且つ平常牛馬視して驅使する所の奴隸に至るまで此の日は特に自由を與へて遊樂を恣にせしめたり

ユラナスの妻ゲーは土地の神にして諸神諸人の母とせらる且つ万物の創造者及び保護者にして最も草木花卉を愛し海陸空中一切の生物に及ぶまで毫も其の愛の到らざる隈もなしゲーの未だユラナスに嫁せざるに先ち孤獨にして擧げたる子三昧あり(一)はポントアス(Pontus)即ち地中海也(二)はネリウス(Nereus)即ち海神也(三)はトーマス(Thamas)なりネリウスは常に海底に住し温和にして且つ仁惠あり其の女をして歌舞をなさしめ以て自ら樂となす此の神は風を海底の空洞に貯藏し其出入を自在にし意の欲する所に從て或は怒濤を高低し或は平波を漲らす皆其の力による所となす次ぎにトーマスに二種の子あり(一)をイリス(Iris)といひ(二)をハーピリス(Harpies)といふイリスとは虹の謂にして之を天の女王の使者と稱し女王將さに地上に事あらんとするときは則ち虹をして地に使せしむハーピリス

比 較 宗 教 學

比 較 宗 教 學

は大怪物にして其數は二人或は四人あり一半は女身に一半は鳥形の躰をなし神の人を罰するに當り召して人を苦めしむるものとなせり恰かも我國の鬼の如し次ぎにジュース(即ちジュピター)神は諸神の長にして一切天地万物の活動力を代表し萬般活動の類悉く此の神の勢力によるものとせらる而して其の支配する所は天上界にして天空の諸現象雨雷電雷總ての變化は皆此の神の作用なりと信ぜられたり

初めジュースの生るゝや其の父神之を呑まんと欲す(前述の如し)母神之をクリート島(Creta)の空洞にかくし此の地の番兵をして武器を弄せしめ以て兒の泣聲を亂して外に聞えざらしむ其の食物は蜂ありて之を運搬したりといふ後漸く成長して終に父神をして五子を吐出せしめ所領は總て之を恣ひて其二子ポサイドン及びブルトーに分與したり斯くてポサイドンは海を支配し暗黒なる地下の支配はブルトー之を掌りジュースは自ら天と陸とを支配せり蓋し三神の此く三處を領有するに至るまでは絶えず幾多の戦争を経過したり其の第一の敵手はチタンス(大怪物也)にしてジュースは雷電を驅りて之か征伐の具となしチタンスは蛇蝎を以て其

の攻撃の用に供したりしと雖も、チタノスの力終に及ばずして天下はゼウスの手に歸したり。後ポサイドンの子天國を奪はんとして反を謀りたることありしが之を最後の戦争として天下平穩の結局を告ぐることゝなれり。此に於てゼウスは天上天下の獨尊となり雲に住し雷車に駕して往行し雲雨電光等を使役する如意なり常にオリンパス(Olympus)希臘最高の山の頂上に住し世界の狀態を視察し人事の運命生死及び幸不幸を支配し賞罰を行ひ此くの如きの類總て此の神の關する所となす故に此の神は獨り諸人の神なるのみにあらず實に諸神中の神なりと稱せらる。又凡そ烈風迅雨激雷怒電等一切の天變はみな之を此の神の怒る所と考へたり。

ゼウスに子ありアポロ(Apollo)といふ最も有名の神なりアポロは太陽の御者にして常に駟馬に鞭ちて世界を周行せり希臘にては毎四年に必ず大競技を行てゼウスを祭る其競技を名けてオリンピクゲームス(Olympic Games)といふ此の日競走競馬競車及び相撲等の技あり勝利を得たるものは賞典を受く當日の得賞者は實に當時に無上の名譽たりしなり。

比 較 宗 教 學

比 較 宗 教 學

之を要するに希臘の神代史によるときは先づ世界を分ちて天と地と及び地下との三大部分とし天地は合して一神の支配となし別に海を支配する所の神あり冥界(即ち地下)を支配する所の神あり而して各部なほ種々の分神ありて掌る所を異にする者どす中に於て天界に總て十二神あり其神の名は前に揚げたる者と重複する所あれども一覽に便にせん爲めに之を掲く而して各神の名に二様あるは希臘にて唱ふる所と羅馬にて呼ぶ所と其稱を異にするによる先づ天界の十二神中ゼウスを長となすこれ神中の神にして神王神父なり其の徽章は手に電光を握れり之に次ぐものは其の子アポロなりこれ詩歌音樂美術の神といふ次はマイルス(Mars)或はアーレンス(Ares)即ち軍神にして殺害を樂となすものなり次てメルキュリ(Mercury)或はヘルムス(Hermes)は神使にして辯舌及び商業貿易の神なり次はバシカス(Bacchus)酒神次はヘルカン(Vulcan)或はヘフエーストス(Hephaistos)鍛冶神次はジュノー(Juno)即ちヘラー(Hera)はゼウスの妻なり次はミネルヴァ(Minerva)即ちアセナー(Athena)は女神にして智慧の神なり(文殊菩薩の如し)次はベナス(Venus)或はアンロメーテ(Aphrodite)は女神にして戀の神なり次に女神ダイアナ(Diana)即ちア

ーテミス(Artemis)は狩獵の神なり次に女神セレス(Ceres)即ちデメター(Demeter)は農神次に女神ヴェスタ(Vesta)即ちヘスチーア(Hestia)は火神なり又海にはネプチューン(Neptune)或はポサイドンの類あり地下にはプルトーの類ありて其の數甚だ多し畢竟希臘人の考ふる所によれば初め神代と稱すべき時代あり多神集合して生活をなししこと恰かも人間社會に似たり人の如く婚嫁し人の如く生殖し人の如く戦争殺傷をなし天と地との間も今日の如く隔絶せずして自在に來往するを得神は此の間に上下して生存し居たるものゝ如く想像されたるなり此等の思想は蓋し獨り希臘一國の上に取りし所のものにはあらず恐くは他國の思想も幾多相混和したることなほ我が神代史か全分我が固有のものにあらずして支那思想の混じたるに似たるものなるべし然れども何れの部分か希臘固有にして何れの部分は外國より混入したるか之を判知すること容易ならされは此に之を容す然るに希臘にては此の神代に續きて半神半人の時代ありそれより人代に遷りたるものとなし我國の神代より直ちに人代に入るに同じからず希臘神代史の奇怪なること今更言を要せず然れども此くの如きは獨り希臘人に

於て然るのみにあらず又實に各國民大抵皆然らざるはなしこれ果して何によりて此の如きや未開人の智識は小兒の智識に似たり小兒の成長して大人となるは恰かも曖昧なる人智の漸次に文明に赴くか如し小兒をして世界の創造死后の狀態を語らしめば亦以て未開人の想像と相類するものあるを見る故に兒童思想の研究は實に古代人の思想を考參するに足る幼稚の思想笑ふ可きの事實も學者に取りては常に貴重の問題たること多し思はざるべからず

第七講 羅馬古教

羅馬は紀元前八百年代より伊太利中央部に起りし古國にして希臘よりはなほ新國なり抑も伊太利古代の民族に四あり其の中央部に住したるものは即ち羅馬人となりしものにして其人種は矢張アリアン種屬の一なり其言語中農作生活等に關する語は殊に相近し且つ其後希臘人か伊太利の南部に殖民してより自ら言語の上に多少の混交を致し隨て其の思想の上にも漸次に相混和し來りしものゝ如し言語思想既に相混和せり宗教亦終に其の數に漏るゝこと能はず甚だ相似たるを見るに至りしとはいへ羅馬は亦自ら羅馬自身の特質を具し決して希臘と同一

視すること能はざるものあり

希臘人は頗る美術の思想に富む隨て其の神を想するや極めて人性的なりこれ既に美術思想に富めるより宗教上にかゝる影響を及ぼすに至りたるものなるか或は宗教上より斯くの如き美術思想を湧出したるものなるか詳知するに由なしと雖も兎に角其の畫ける神像刻める天使は頗る其の美術的人性的なることを表示するものゝ如く羅馬人は則ち之に反して美術思想に乏しく隨て其の神を想するや自ら抽象的、神靈的にして各個物に悉く神名を附し神數の多き殆んど不可數といふべきなりされは希臘の神は人類の如く生活あり變化あり然れども羅馬の神は不變化なり恰かも之を東洋に比するに希臘の神は印度教の如く羅馬の神は波耳士亞教の如し且つ希臘は元來其の文明理論的學術的に進みたるも羅馬の文明は實際的實行的に發達したり故に羅馬の宗教は其の儀式法則等の大に整頓せるを見る

羅馬の神は多く希臘の神に類すこれ前に述べたる如く恐くは希臘人と混合したるより自ら遷移し來りしものなるべし羅馬元來固有の神なきにあらざといへど

も後には相結合してかゝる神とされるものならん今其の神の重なるものを擧ぐれば(一)テラヌ(Tellus)(二)サキルン(Saturnus)(三)オプス(Ops)(四)ジュピター(Jupiter)(五)マヤナス(Manus)(六)ディオアナ(Diana)(七)ヴェーナス(Venus)(八)マーナ(Mars)(九)ピウス(Pius)(十)ピラトナス(Pilumnus)等にして各其司る所の職あり然れども亦別に希臘の如く此等に関する煩しき神話奇談多からず後久しからずして耶蘇教の入り來りしかため全國其教を奉するに至れり

第八講 猶太教

猶太教は人種教中特殊の特質を有するものにして他宗教の如く之を他人種の間
に擴張し他宗教のものをも誘導せんとはなさずして専ら自己人種中に此教を保
護せんとするものなり即ち所謂人種教にして頗る保守頑固の風を具へたり今日
歐洲諸國の間に散在せる猶太人の如きも亦依然として其の舊習を改めず
耶蘇教は日曜を以て休日となすといへども猶太教は之に異にして土曜日を以て
休日となす蓋し日曜は神の世界創造を始めたる第一日にして土曜こそ其の事業を
終へて安息したる當日なりといふ又此教は耶蘇舊教の如く偶像を拜することな

比 較 宗 教 學

く純然たる一神教なり唯金曜の夜土曜の朝を以て禮拜式を行ふに過ぎず其の寺に入るや總て被帽を以て禮となし脱帽を禁す且つ其寺院にては男女席を同うせざるを制規とするものゝ如し此の教の經文はヘブライ語を以て之を書し寺院内の廣告文迄も皆ヘブライ語を用ひたり故に其寺を「セネゴク」と呼ぶ

猶太教を信するもの即ち猶太人の性質たる極めて守舊陋固にして決して他人種と結婚することなく僅かに其の自己人種間に於て交婚するのみ土曜日には皆其の業を休み店頭を閉鎖するの古風は今に至るも嘗て毫も變ずることなし從來歐洲諸國の間にありても常に其の排斥を受くること恰かも我が國の穢多非人に異ならず猶太人は基督を殺害したるものなれば其の徒のために排斥せらるゝも故なきにはあらず然れども之かため交際の區域も自ら狹隘にして費用を要すること少く之に加ふるに一般に吝嗇なる性質を有し頗る財産に富めるもの多しといふ現今此の教を奉するもの地球上に凡そ六百万人ありといふも魯士亞に住するもの實に其の半ばに居る

猶太人はヘブライ人種又の名イスレール人族とも稱すアブラハムを以て其の祖

比 較 宗 教 學

先となすアブラハムの祖先ヘーベルと稱するものありヘブライの語蓋し此名より轉化し來れりといふ而してイスレールの名はヤコブのときより始まるといふイスレールはヤコブの異名なり又猶太の名は此人種カペロソに囚虜となりし時より起るといふ即ち「ユダース」といへる人より起れり此の人種が一般に祖先とする所のアブラハムの子に「イサク」と名づくるものあり「イサク」の子を「ヤコブ」といふ皆此の人種の長なり「イサク」死後此の人種分れて十二種族となる紀元前一千八十年ソールと稱するもの其の王となる是を最初の王となす後紀元前九百七十五年に至て十二種族中の十種族合同して從來の王國を離れて別に一王國を構成し從來の王國は僅かに二種族を除すのみとなれり此に於て二種族はソロモンの子レオホームを推して王となし後十九代を経てアッシリアの王シャルマテザいのために征服せられ人民の大半は虜囚となれり次て紀元前五百八十六年チブカドネザイ又猶太の都城セルサレムを陥れ過半の人民は之を縛して凡そ七十年間ペロソに禁錮したり之と同時に十種族の王國も滅亡したれば兩王國の人民は悉く支離分散して之より以後の歴史は殆んど知るべからず紀元前百年代に當り羅馬

の兵セルサレムを陥れ其の屬國となすやヘロッドを以て屬國王に命じたりしが次
て紀元七十年(九月八日)再び羅馬王チタスのために征せられセルサレムの市街は
焼き拂はれ堂中は打ち毀たれたり百十万の猶太人は悉く殺害されて一人存する
ものなく僅かに免るゝを得たるものは皆四方に逃散し之より以後の慘狀殆んど
之を筆にするに忍びざるものあり爾來其人種歐洲諸邦に散在し近代に至る迄耶
蘇教徒のために敵視せられ種々の制限束縛の下に生活し奴隸と同一に使役せら
れ甚しきに至ては一國內居住の地を限制して其の外に出づるを許さずルーテル
の如きすら宗教革命を唱ふるに當り猶太人の經文其の學校寺院等を焚燒せんこ
とを主張したりといふ

猶太の文明は世界中にありて一種特殊の文明なりきそは物質的の文明にあらざ
して精神的の文明即ち宗教的の文明なりしこと是なり凡そ地球上最も宗教思想
の盛なりしものは猶太と及び印度の二國なるべし而して猶太教と印度教とは各
特殊の性質を有し自ら其の長所短所を異にす而して猶太教に最も特色とすべき
所は即ち其の所謂一神に於ける思想なり印度教の如き亦一神に關する思想なき

比 較 宗 教 學

比 較 宗 教 學

にはあらずといへども未だ猶太教の如く全く他神を排して純然たる一神の思想
には比すべからず純然たる一神獨在の思想は實に猶太人種の特有なりと云ふ世
界到る所何れの時代にありても多少此の一神的思想なきにはあらず然れども
大抵皆此の一神に並べて或は一神の下に他神を合して多神的の形を有するを常
とす印度教は裏面よりいへば一神教なるも表面の形は多神の集合なり猶太教は
獨り然らず且つ同じく神といふも猶太教に於ける神と他宗教に於ける神とは又
甚だ徑底あるを覺ゆ即ち猶太教の神は精神性活動的の神なり其命令の下に世界
立ちに成る所の神なり故に其の信徒の精神上には無限の活力を與へ人をして自
ら奮進勇取の氣力あるを覺えしむ實にこれ猶太教の長處といふべしされど其の
宗教の全く學術思想に乏しきを見るは最も此の教の短處といはざるべからず故
に今日より之を見れば固より荒唐の談多く敢て善良の宗教として信奉すべき程
のものにあらずと雖も比較宗教學上に於ては大に研究すべき必要なる宗教と謂
はざるを得ず其教理の如きはアブラハムの受けたる神命モゼスの神より直受せ
る十戒に基くものにして具さには舊約書に載する所の如く今は特に之を述べざ

るべし因みに舊約書は猶太人の歴史にして其の古傳神話上は世界の開闢より始まり累代の事實の種々の人により種々の場所に於て記載せられたるものなりこれ唯猶太人の古傳のみ然るに今日耶蘇教徒の類がさる一地方の古傳神話を携へ來りて全世界の上に其の開闢説洪水談を當て箝めんと試むるものあるは笑ふべきの至りなり若し彼にして然かいふとを得ば我が國の神代史も亦實に世界の神代史といふを得べきか)

第九講 亞米利加古教

亞米利加の古教とは白人渡米以前に既に一種の文明を形成し居たるメキシコペリウの宗教を指す蓋し亞米利加土人(即ち印甸人)の祖先の何處より此の地に來りしものなるかは人種學上の一大難問にしてコロンプスカ發見したりし當時のメキシコの狀態の如きは既に驚くべき進歩をなし居たりしと云ふ學者の説く所によれば米人の頭形及び黒髮黧黑等の上より考ふるに元と亞細亞特に東方蒙古人種の此の地に來りしものなること疑なきか如しといへり然れども固よりそは何年の頃にやあらん知るに由なし而して其の移住の道程は悉くは北部ペーリウグ

海峽を渡りしものならん或は曰ふ冬時寒冽の時節に於ては此の海峽は氷りて堅氷となる蓋し移住人は此の氷上を渡りたるならんと成は曰く最古の時代は今日の地勢を以て推すべからず想ふに當時にありては海水未だ今日の如く陸地に侵入せず隨て東西の地甚だ相接近し太平洋の如きは今日の如く廣漠たるものにあらずらざりしにより其移住も容易に此の海上を渡りてなし得たるものならんとも米人種には凡そ三種の別あり第一は現在の白人種なり第二は白人以前に此の地に住したりし印甸人なり第三は印甸人以前になほ一種の入族ありて此に住し居たりしといふ然れども此の太古の人種は今日全く此の地に存せず唯今日往々一万年以前の遺物を掘り出すことありて之により推測し僅かにかゝる人種の居住したりしことを知り得たるに過ぎずして固より到底詳細の研究をなすこと能はず印甸人は今日(一千八百二十三年の調査に據るに)存する所の總數凡そ八百六十一方ありと云ふ然れども年々漸く其の數を減するの傾向あること我國の蝦夷人に於けるか如し印甸人種として最も盛なりしはメキシコ帝國にして之に次くものはペリウなり今は先づメキシコの宗教を説かん

(114)
 コロンブスの米地を發見するや當時西班牙の勢力頗る盛にして國勢を海外に毒
 かしたる時なるが此のメキシコを滅亡に歸せしめたるものも亦實に西班牙にし
 て専ら勇將ハルマンド・コルテズの力によるものなりハルマンド・コルテズ一千五
 百十九年多少の兵を帥て本國を出發して米に着するや先づ謁をメキシコ國王に
 請ひ交通の好を締結せんといふ王之を群臣に下問す此に於て國內の説分れて二
 派となる或は宜しく之を打ち壞ふべしといひ或は之を優待せんといふ蓋し當時
 メキシコに行はれたる一種の宗教ありて從來非常に壓制なる帝王の威力を厭ひ
 神使の天より降るありて必ず其の虐待より人民を救ふの時來るべしと信じ居た
 りしが今西班牙人の來るに遇ふや此等の迷信者は皆以爲へらく是れ神使なり宜
 しく優待すべし終に優待に決す此に於て西班牙人は益策を施し兵具軍器を示し
 て之れを驚かしめ愈其の神使たるの迷信を高めしめ結局種々の争端より終に兵
 力を以て帝國を滅亡に歸せしむるに至りたり然らばメキシコの滅亡は實に一の
 迷信の影響ともいふべきものにてありしなり以て宗教が人民の間に盛に信じ居
 られたりしことを想見するに足るべし

西班牙人のために滅ぼされたるものは印甸人種中アズテック人種と稱するものな
 り然るにアズテックの此に居住する前此の地に相應の文明をなし居たりし一族
 あり之をトルテックと名づくトルテックは紀元六百年代に北部より此に移住し來り
 たる者にして西班牙人の侵入より二百年以前迄此に居を占めたる者なり後アズ
 テックのために逐はれてアズテック人種此に帝國をなして以來二百年にして西班牙
 に征せらるアズテック人は一定の國語を有し亦文字(繪文字)をも有せり政體は君主
 專制にして國君の無上の權力を有し其の位に登るものは或る定まれる一族中よ
 り撰定するものなりといふ
 印甸人は一般に日月を神として之を拜せりされはメキシコのアズテック人も亦之
 を重なる神として崇拜したり一をオメテクトリといひ他をオメシファイトとい
 ふオメテクトリは男神にして日なりオメシファイトは女神にして月なり此の二
 神を前中の第一位に置く人民は毎朝太陽を拜し神官は一日數回日神の社殿に於
 て禮拜を行ふ總て他の諸社は皆此の日神に附屬するものとせられたりアズテック
 人は此の印甸一般の信する所の外又此の人族に特別に附屬する所の神即ち國神

を有せり此の國神中には頗る重せられて殆んど日神を壓せんばかりの勢あるものもありき其の重なるものをウイツェロポクトリー (Uikilopetei) テーカトリボカ (Teyatipoa) の二となすウイツェロポクトリーとは「左りの蜂雀」といへる義なり左どは位置を示す即ちテーカトリボカと左右に位置を取るによる蜂雀の名は蓋し古傳の神話に基く古昔或る一女日神を拜せんかために神社に行かんとし途にして美麗なる蜂雀の足下に落ち來るあり(蜂雀は鳥名土人の神聖視する所)女即ち拾ひて之を懷にし行て神に献せんとし行くとししばらくにして胎内に聲を發するあり懷を探れば蜂雀の形は見えずして子は其胎内に宿れり其の生れたる子即ちウイツェロポクトリーなりとこれ蜂雀の名ある所以なり此の神は手に盾と槍とを持ち頭には鳥嘴の如き帽を戴き左の足に蜂雀の羽翼を具へたりウイツェロポクトリーはアツテック人のために種々の功業をなし重大の恩惠を與へたり後母と共に上天したりといふ思ふにこは太陽の一部分即ち百花爛熳蜂雀の梢に囀つる一歳の好時節春時の太陽を表したるものなるべし次にテーカトリボカとはウイツェロポクトリーの兄弟なりウイツェロポクトリーは天に上り去りぬれどもテーカトリボカ

は地にありて此の世を支配すテーカトリボカとは「明鏡」の義なり手に鏡を持てり人の行爲の善惡の照見して之を賞罰するなり凡そ人の生死饑饉一切の禍福は皆此の神の爲す所となす即ち直接に吾人々間を支配する神なりとす以上二神の外雨の神農業の神等も亦甚た重せらるる
 メキシコの古傳宗教論之を一の妄誕怪説として一顧を値せずとせば言なきのみ然れども之を意味あるものとして考ふるときはいとも面白き研究なるべし此の地に於て雨の神か特に尊崇せらるるか如きも元來降雨の少なき地なるによらずんばあらず其の他太陽を神とするに至りし所以神の思想の起りし所以に考らば彼等か宇宙の現象に接して感得したる所も亦大に學者の注意を引くに足らざらんや從來世人は單に宗教を見るに其外面のみを見て内部の意味を見ること能はざりき今日學者の研究する所は此の内部の意味にあり野蠻人の宗教も猶ほ捨てざる所以なりメキシコの宗教にありて最も重要な儀式は人を犠牲となし之を神に供するにあり而して此の犠牲となりしものは能く神化し得べしとは一般の信仰する所なり故に其の大祭に當りては必ず此の典を行はずといふことなし

蓋し人を以て犠牲となすこと野蠻人中に其の類例を見ること決して珍らしかからず恐くはこれ往古食人の遺風より來るもの歟或は人身の全體を以てせずして唯身體の一部を以てし若しくは一部の血液を以てするものあるか如きも思ふに人を以て犠牲に供するの俗より漸次に變化し來りしものならん

次きにメキシコ教に行はるゝ儀式の一として斷食の苦行をも數へざるべからず其の行はるゝ極めて嚴重にして且つ其の日數も亦極めて長し勿論斷食の事たる何れの宗教にありても多少此の式なきものなく唯日數の長短と度數の多少との差あるに過ぎざるものにして想ふに畢竟身體上の慾を脱して神聖に歸せんの念慮に基きしものなるべしといへども寧ろそが根本に遡りて野蠻人の斷食行の精神を一考するに未だかゝる高尚の思想ある筈なく必ずや斷食の久しき身體衰弱し精神恍惚として夢幻の間に神奇を感ずることあるより遂に之を以て神に通ずるの一方便と思惟したるによるにはあらざる歟

ペリウの宗教 ペリウの文明も其の起原は頗る古代にあること疑ふべからずと雖も年代今考ふるに由なし唯メキシコよりは少しく後にあるに似たり而して歐

洲人によりて發見せられたるもペリウはメキシコの後にあり即ちメキシコ發見は紀元一千五百十七年にして其の滅亡は一千五百十九年より一千五百廿一年の間でありペリウの發見は一千五百廿四年にして趣えて一千五百卅三年終に滅亡に歸しぬ其の發見者征伏者をフランシス・ピザルロ (Francis Pizarro) とす而してそが征伏の方法は恰かもコリテツのメキシコに於けると始んと同種にして蓋し彼れに倣ひたるものなるべし

ペリウ古代の歴史は之を知ること能はず唯其の種族の北方より來りしものなることは國人の傳ふる所なりと云ふ然れどもピザルロの發見せし當時にはメキシコの往來は全く隔絶し居たるを見れば兩國の初めより別種族なることは明けし或は曰ふ太古は同一種族より出でしものなれども後世中絶して相知らざるに至りしものならんと而してピザルロ發見の當時は其の文明も相應に進歩し政體は君主專制にして君主の勢力極めて強大なりきといへり王族は之をインカと云ひ國王の結婚は必ず其の兄弟中に於てするの奇風あり蓋し該國の古傳によるときはインカ或は一神の流れにして若し他族と結婚するときはその神聖を汚

すの怨れあるによりしものなり國王及び貴族は多妻を許し國王死するときは繫
綴者は悉く之に殉死するの風習ありと云ふ

比 較 宗 教 學

ペリウの宗教は太陽崇拜教なり即ちペリウ人は太陽を以て天地万物の支配者と
なし最も熱心に之を禮拜し家屋は東面にして太陽に向はしめ人面狀の黄金板を
以て太陽を代表せしめ之を敬禮すること太陽に異ならず太陽は之をアンチと呼
ぶアンチに次いで尊ばるゝものをマクイラをなす即ち月神なり月神は日神の
妻にして且つ妹なりといへり銀板を以て之を代表せしむ又虹を以て日月兩神の
僕なりといひ星の神を以て月神の侍女なりと稱し其他天象地變を以て神靈視
し之を崇拜すること多し一年四回神の大祭を行ふと云ふ太陽を以て神の最上と
し帝王は日神の子孫なりといふはメキシコ、ペリウ共に宗教上同一の思想にして
最も顯著の點なるべし

凡そ天變地異を崇拜するもの即ち拜物教なるものは物自体を以て之を神となす
ものなるか將た別に裏面に一層の深意を含蓄することなきか今從來學者一般の
説く所によるに單に拜物教といふと雖も比較的に研究考察するときは最初は最
も感覺到顯著なる日月を拜したるものなるべしと雖も漸次年月を経るに及びて
は獨り直に日月を拜するのみならずなほ万有を支配する無限絶對の靈妙を感得
して一種の意味ある禮拜となりしものなり即ち宇宙無限の勢力を暗認して天變
地異の妙作を拜し、これより漸々一神教の思想發達し來りたるものなりといふに
あり

第十講 歐洲古代宗教

比 較 宗 教 學

歐洲人は即ちアリアン人種にして其の宗教は現に耶蘇教によりて一統せられ居
ることは人の知る所の如し然れども古代此の人種の未だ野蠻の狀態にありて數
多の部落に分れ居たりし時は各特殊の宗教を固有し居たりしものなり今は先づ
魯西亞古代の宗教を概言すべし

魯西亞人はアリアン人種中スラヴ族に屬するものにして歐洲の東部に住し其の
中自ら二大族に分るべし言語上の特點より一は南東の地に住するものにして即
ち魯西亞本部及びホルガリヤ人等は是れなり二は西部に住するものにしてホヘミ
ヤ、ポール等の人族の如し此の二大族の上には行れたる古代宗教の性質は他のア

リアン人種に比して最も下等なるものにして一部は印度教に類し他の一部は恰かも火教に近似したるものなり然れども固より印度教の哲學的なる火教の道德的なるか如き高尙深遠なるものにはあらずして僅かに此の二教の外道を混合したるが如きものに過ぎず此の宗教にありて最も主なる神を雷火神(雷と火を合せて一神なる神)となす之をペラン(Penn)と云ふ即ち天神にして火焰中に立てる赤面の神なりスラヴ人は此の神の爲めに絶えず火を點して之に供ふこれスラヴ人一般に等しく奉ずる所にて之に捧ぐるに森林を以てす故に神林と稱すべきもの諸方に存す其の他ラツドゴスト(Radgost)ツオロス(Volos)等の諸神あり就中ドモツロイ(Domovoi)と稱する家神最も普く崇拜せらる此の神は多毛の侏儒なり常に住を爐中に占め若し一家に不祥の事あるときは必ず之を豫告し死人あるを知らば夜中哀悼の聲を發して之を家人に前知せしむなほ此の神は獨りその家族を守護するのみならず家畜の類に至るまで亦之を監督し家運全休の守護神なりといへり其の性極めて柔和にして害を加ふるか如きなしと雖も又時としては赫怒することなきにあらず人の睡眠中覽せらるることあるは則ち此の神の怒りに觸れたるものなりと

又此の宗教に於ては太陽を以て女性の神なりとなし太陰を以て男性の神なりとなし星は日月の子にして銀河は鳥道なりといふ蓋し人の死するや靈魂は鳩の形をなして口中より飛び去り上昇して銀河を翻翔するものとなせり其の他鳥を以て悪魔惡靈の化身とし又婦人が夏時炎熱の候朝嗽未だ上らざるに先ちて野外に出で其の肩に絹片の肩掛に露滴を凝集せしめ水氣を以て小兒を洗ふときは天使の如く清淨ならしむべしとの説を信じ其の他神明に通すべき一種の魔術ありことを信じたりなほ宗教に關する詩歌說話甚だ多し之を要するに魯西亞古代の宗教は多神教の一點より見れば印度教に類したるものにして火を尊ぶの點は火教に類したるものといふべし然れども唯二教の如き高尙なる道理を包有するものにはあらず

第十一講 獨逸古代教

アリアン人種の歐洲に侵入せしものを大別すれば希臘及羅馬人、ケルト人、チートン人、スラヴ人の四となすべし此等の民族の歐洲に移りしは其の何年頃なるや詳

(二四)
 にすること能はずといへども大凡紀元前二千五百年以前なることは信すべきに
 足れり就中希臘羅馬人は姑く措きケルツ人を第一としチートン人之に次きスラ
 ヴ人を最後とすべしこれ現今此三人族の占領せる住處より推して前者の後者の
 ために自然驅逐せられ漸次に西方に進みしものなるを知りしものなり羅馬人は
 當時早く既に文明の極盛に達し居たるは事實なり唯此事實を以て前人種より以
 前に入り來りしものなりとはいふべからず文明の程度の高低は決して其年代の
 前後を計る唯一の尺度とはなすべからず然れども羅馬人と他の三人族との交際
 は久しく隔絶して羅馬人の大に文明の域に入りし當時他の三人族は尙ほ極めて
 蒙昧野蠻の有様にありしなり羅馬の豪傑シーザルが西北蠻族を平定一統せんか
 ために進で北方に向ひ蠻族を征討したりし時始めて此等蠻族の状態を知るを得
 たり今シーザル當時の記録によりて先づチートン人宗教の大畧を述べべし
 チートン人の宗教は之をスラヴ人に比すれば幾分の進歩を認むべし此の教は火
 教の善惡二元の説を爲すに類し亦た善惡二神の上に其の説を立てたり然れども
 又固より火教の如き深理あるものにはあらず此の二元の思想は魯西亞教にも之

れありと雖も魯西亞人は之を有形的に考ふるのみにしてチートン人の如く無形
 的思想を有せざりき又此の宗教は多神教なりと雖も希臘の多神教に比すると
 きは敢て多しといふべきにあらず其の神中に希臘印度の神に對して相同じきも
 のあるはアリアン人種未分以前の宗教の存在を證するに足る韋陀經にては神を
 Dyans としひ希臘にてはゾニス(Zeus)といひ獨逸にテル(Tyr)といふ其の語原の
 一なること知るべしチートン人は此「ユ」神を天の神とするも是れ一般に然るに
 あらず其一部の人民は之を刀劍の神となせり又其人種一般に最も尊崇せらるゝ
 獨逸特殊の神をエーソル(Aesir)及ヴニル(Vair)とす是れ善神にして天災地災に
 對し人を保護するものなり而して天災地災は惡神の行爲なりと解せり又善惡二
 神の中間に居する神あり「イ」^イと云ふ其の數甚だ多し(英譯して)之をGiansとす巨人
 の義なり中間の神は善惡神の下位にあり時には善をなし時には惡を爲すと云ふ
 かゝる數多の神中に於て後代に至るまで最も尊崇せられたるものをOdinnとな
 すこれより一神教の傾きを生ず此神は初め勇將の神にして王侯軍士の保護神な
 りしが後には世間唯一の王精靈の長といふに至る或は獨逸には初めより一神的

の思想ありしが如く説くものありといへどもそれは極めて後代の事なり其の他天地の現象に對して種々の神を配したるもの數ふるに勝へずと雖も大別すれば善惡の二神を出でず即ち天地自然の現象中晴雨明闇等の二種に配せられしより來りしものなり

(二三)

又シールサルの記録によるに此の種族中(フランク、ゴール、ブリトン人を指す) Druids と呼ばるゝ一種の階級ありて宗教に關する一切の儀式を掌り兼ねて其の全族を支配す是れ所謂僧侶なりドルイソの語原はもと希臘の樺樹より起りたるものに^①して此の種族の樺樹を以て神聖なるものとし之を祭るを以て知るべしと云ふ然るに之に反對するものは曰くチートン人と羅馬人との交渉すら極めて後代に起りたるもの況んや希臘語のチートン人の間に入り來るべき理由あらんやと又他の一説に従ふときはクルツ語にて神と話との二語を合したるものなりとなすそは兎も角も其の職掌とする所は宗教政治に關するものなるを以て社會上最も名譽の位地を占め居たるものなること知る可し

該宗教は樺樹を以て神木とするか故に國中到る處樺林鬱茂し特に樺の宿り木を

重んじ萬病に特効ありとす之を搜索せんためには全族集合して僧中の長官之を截るを式とす而して之を截る所の僧官は白衣を着し黄金の刀を用ふ之を以て非常に祝賀すべきことと思惟せり又蛇の卵を以て魔除となし之を搜索するに盡力し若し暗黒中に之を得るものあるときは無上の大慶となせり

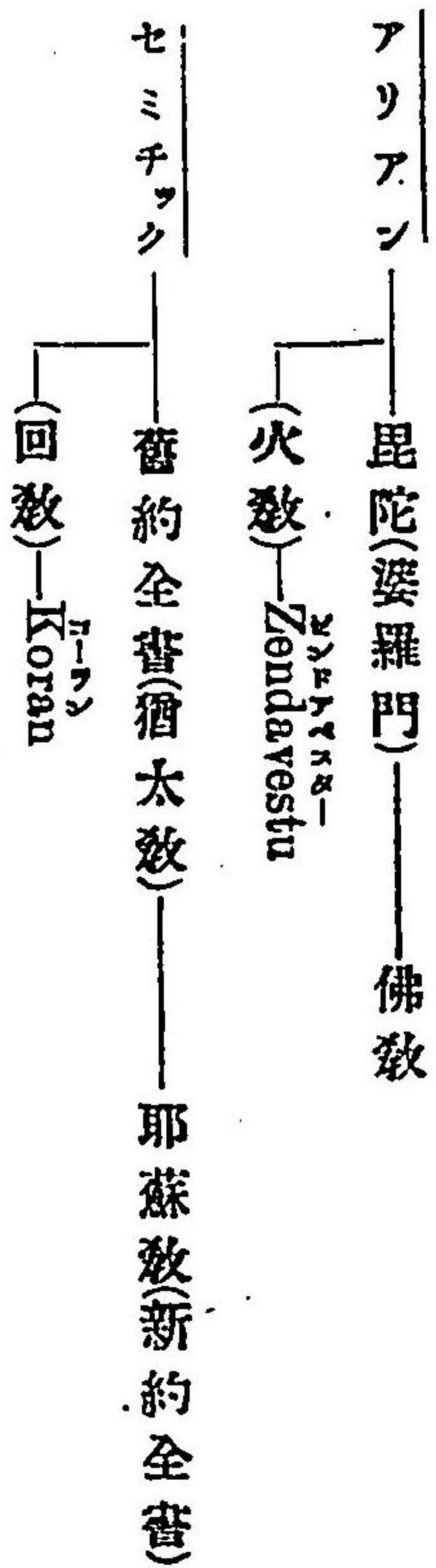
第十二講 マホメト教

マホメト教は世界三大宗教中の一にして信者の數は明かに一定したる總計を得ること難しといへども最近發行の書によるに世界の人口十三億中佛教儒教道教の徒四億九千万人耶蘇教徒三億六千万人にして回教徒は一億万人其の他種々の宗教徒合して一億六千五百万人なりと云ふ

一億万人の回教徒中印度の信者最も多くして四千一百万人ありといひ或は他書によるときは五千十二万五千八百八十五人なりと云ふ其の他土耳其埃及比耳西亞等の諸國は十中の九は回教信徒に屬するものなり該教徒か巡禮としてメッカに參詣し來るもの一千八百八十七年の報告によるに陸よりは二万八千二百五十一人にして海よりせしもの六万八千六百八十九人なりと云ふ此の一事亦以て其の信者

の熱心を見るに足るべし

マクスミラー氏の比較宗教學はアリアン人セミチック人の間に起りし宗教を比較して左の圖を示せり



比 較 宗 教 學

其の發達分化の摸樣の相同じきこと一目瞭然たるべし但回教は耶蘇敎の後に起り火教は佛敎の前に出でたりしは稍趣きを異にするのみ而して回教はセミチック人種中に起りてアリアン人は移り佛敎はアリアン人種中に起りてチーラニア人に弘まりたり

回教の開祖はマホメトなり故に呼でマホメット敎といふ然れども教徒自身には自ら信仰者をモスレム(Moslem)と稱し其の敎をイسلام(Islam)といふ所依の經典はコーランなり或は其信者をモッシュルマンとも云ふ此の敎はもと(一)猶太敎(二)耶蘇

敎(三)亞刺比亞古敎の三敎折衷より成りしものなり亞刺比亞古敎は偶像敎多神敎にして所謂拜物敎なり初めは天赫を拜したるものにして後に之を偶像に配し禮拜するに至りしものなり

マホメット(Mahomet)又モハメド(Mohamed)ともいふ紀元五百七十年(或は曰く五百六十九年)亞刺比亞のメッカに生る自ら神命を受けその旨を世に弘布する豫言者なりと稱へたりしは實にそが四十一歳即ち紀元六百十一年の時にてありき然るに當時非常の反對者ありて足をメッカに止むること能はず六百二十二年六月十五日終にメッカを遁走するに至れり此の年を以て所謂回教の紀元と定む後六百卅二年齡六十二(亞刺比亞曆にては六十三歳とせり)にして臨終すマホメットは元と亞刺比亞の貴族なりしが其の生れし當時は家極めて貧苦にせまれり二歳にして父を喪ひ母の手によりて養育せられ八歳にして母亦死す爾後伯父によりて成長し伯父は彼をして商人たらしめんとしき後年商事に従ひ隊商の列に其はりてシリヤ地方に至りしとき一僧あり之を相して曰くこれ天降の豫言者の相なりと二十五歳にして一豪族の寡婦に備はれ二十八歳にして終に之と婚し俄に富を得しかばまた

比 較 宗 教 學

(1110)

行商を爲すを要せず自己昔日の貴族たりし榮譽を想ひ宗教家となりてその家名を回復せん企てをなすに至れりこれ行商としての旅行中各地の宗教を見聞して稍得る所ありしに萌せるなり此に於て當時の亞刺比亞教を改良せんと欲し卅八歳の時メッカ近傍の岩穴に入り終日神を拜し斷食を行ひ屢神の託宣を得歸て之を其の妻に告ぐ妻信せずマホメット之を説くこと數々にして漸く稍之を化することを得たり四十歳或は曰ふ四十一歳にして始めて宣託によりて神命を受くと號し先づ其の僕に説きて次ぎに伯父に及ぼし後に土地の有力なるもの五人を化し其の弟子となせりこれ後に各一方の將として各地に布教したるものなりこれより益自ら豫言者なりと稱して大に其の教を説きたり

彼れは神は唯一なることを説きて所謂偶像教を排斥し且つ耶蘇教に對しては神は子及び家族を有するものにあらざとの言をなし以て耶蘇神子の説に反對したり而して自らは唯神命宣傳の豫言者と稱して敢て神子の言をなさず亦舊約書的全體を取りしにあらざといへどもその中より得し所も少からざりき即ちアラハムの説の如き是れなり猶太教耶蘇教の如きは共に誤謬の解釋をなしたるものと云ふ經典コーランは新舊約書に歎せる思想を含めり其の一部はメッカに於て成りしものにして他は其の後に成就し全部の完結を告げたるはマホメット死後にあること疑なしマホメットは斯く確かにコーラン一部分の著者なり(全部共にとはいはず思ふに此の經典は決して一人の手に成りしものにはあらず)然れどもマホメット生涯の間教育を受くべき時期を見ることが能はず何時學問したるかは之を詳知するに由なきなり

マホメットの始めて自ら神命の弘布者なりと稱するや人皆之を笑ひて魔術者なりと嘲りしが忽ちにして卅九人の弟子を得しかば固有の宗教者は始めて其の勢の盛ならんことを恐れ又上流の人にありてはその政治に干渉し來らんことを慮り共に之を害せんと爲したりしかはメッカの地を遁れてメヅナに奔り共に其の法類を集合して武力に訴へ之を弘布することをはじめたりこれより到る處劍を以て教を信ぜしめ劍を戴くかコーランを戴くかと呼び其の勢非常に増大して數代の後に及びては東は波斯印度より支那に至り西は亞弗利加より西班牙の地に及びりサラヒン帝國の建てられたる實に此の間にあり今日の土耳其は昔時は盛況な

しといへどもなほ儼然たる一帝國は歐洲の南東部に於て政教一致の政を布き法律は勿論總て官吏の登用に至るまで悉くコーラン經を用ふるものあるを見る

マホメト始めて此の教を開きしより二十二年にして亞刺比亞を統一し次てヰテヤフニシヤ亞非利加等の地にひろがれり

回教は一神教なり其の猶太耶蘇及び亞刺比亞古教を折衷したるものなることは前に述べたり故に甚だ三教に類似の點あることは言を俟たずなほ其の説く所は主として此等の諸教を調合して特に亞刺比亞の人心に適せしむるの組織をなししものなり其の宗にて説く所の極樂は樹木喬く涼風靜かに扇ぐか如く云へるは蓋し亞刺比亞の地天暑く雨少きによりしなるべし特に自由主義を主唱せるは其の自國奴隸の制度の嚴に過ぎて壓抑を受くる甚たしきに起因したることば明なり其の他此の類のこといとも多かり且つ武力を以て布教の手段となすに至りては實に此の宗唯一の特色とやいはまじ

同じく一神教なれども純粹なる一神教と稱すべきは猶太教なり耶蘇教は三位一體の一神教にして神父神子聖靈の説をなせりマホメトは神子を取らずといへど

も天使の説を許すこと耶蘇教に等し而して其の天使なるものは極めて精微の分子より成れるものにしてその分子は火の分子と同一なるものなりといへり神は人を造るに先ちて初めに天使を造れり人死するときは天使は死中より人の靈魂を出して天に誘導し又他の天使は人の死するや罪を裁判し悪人は之を地獄に誘ふ其の他天使中に信者の辯護者たるものあり又ば地獄の長となりて罪人を刑罰すべき命令者たるあり地獄にはなほ幾多の惡神其の中に住居せり極樂には七階に分かれたれども地獄も亦七階の別あり其の苦痛の状態は譬ば佛教の所説と相似たり尤も此の點は他教にても大概同一の趣きあるべし極樂に至りては其の宗教の起りし土地によりて異なり即ち其の地の理想的善美なる所を極樂となせばなり要するに耶蘇教猶太教と大同小異なりといふて可なり

説教信者の行ふべきものは巡禮祈禱懺悔等にして祈禱は一日に五度其の都度コーランの一部を讀み讚美歌をうたひ毎金曜日寺院に集合して公會を開くを常とす斷食は毎年九月中日出より日没まで之を行ふを例とすと云ふ巡禮は一年一回は必らず之を欠くこと能はず道德上此の教の缺點として數ふべきものは一夫多

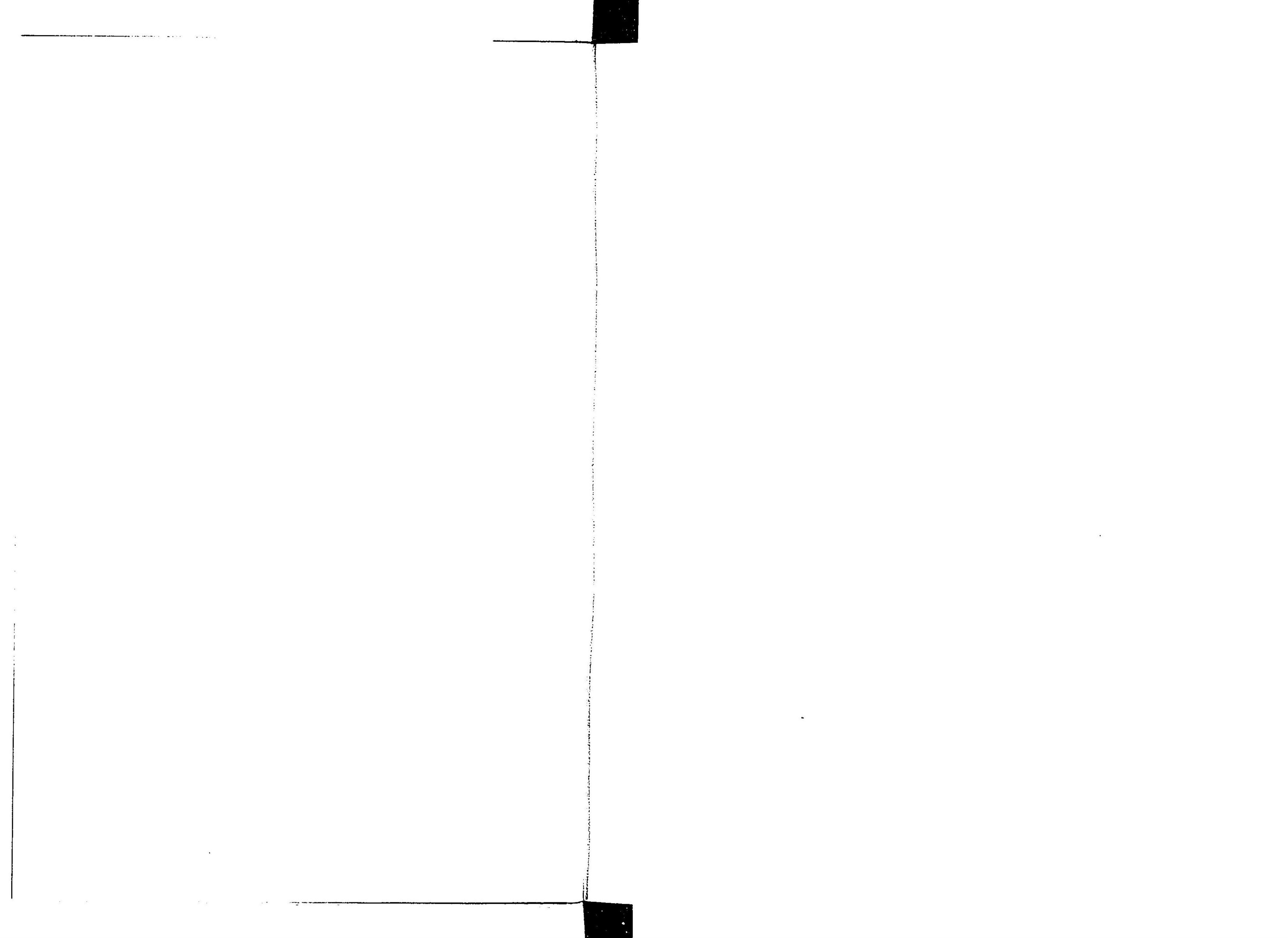
妻を許すこと是れなり四人迄を正妻とし以上を妾となす飲酒博奕は此の教の最も堅く嚴禁する所なりマホメットの生涯の行爲は自ら奉ずる極めて質素にして其の徳も亦頗る高かりしものゝ如し耶蘇教の一派たるモルモン宗も一夫多妻を許せるもそれは自宗信徒の繁殖を願うてなりマホメットの之を許し其の眞意を知ること能はず

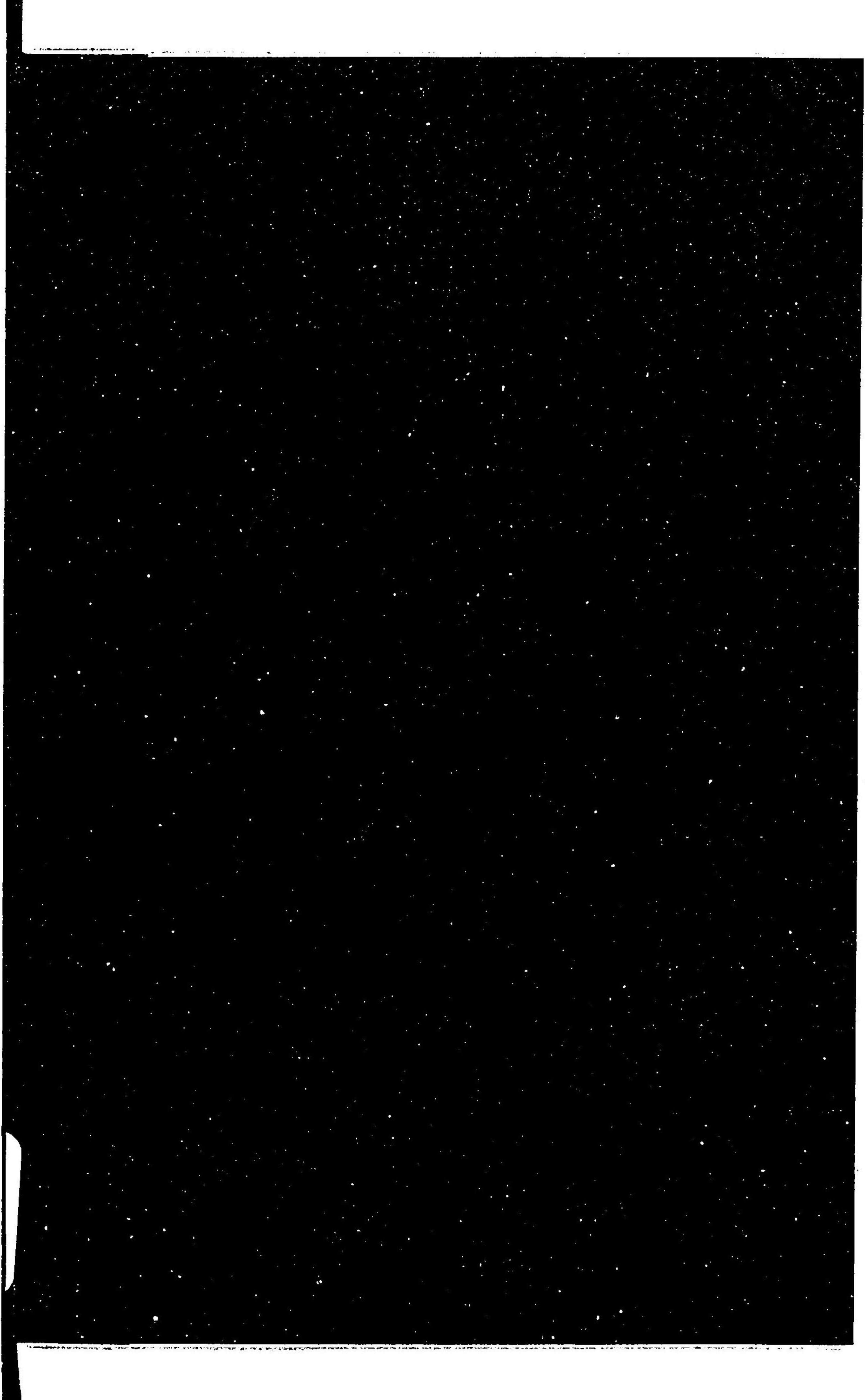
マホメットの死后其の教分れて大小七十二派となり其中正義に合するもの唯一あらんのみとはマホメットの豫言せし所といふ然れども何れか正義に合するものなるかマホメット未だ之を言はずりき此等多數の宗派ありといへども大分三派を出でざるに似たり一はサンニス二はシアヤス三はワハピスなり中に就きてサンニス派にてはアブベック養父オマー養父オルマンを相續者とせり此の他小區分一々述ぶべからず兎に角此の教の迅速に非常の勢力を以て世界に弘布したるは實に驚くべきものあり之を我が國の宗教者に比するに恰かも日蓮聖人の跡に類する者あり其の豪氣其の方法の劇烈なるはた一生の傳亦頗る相似たる者あるを見る

比較宗教學畢

終り







14

225

013751-000-4

14-225

比較宗教学

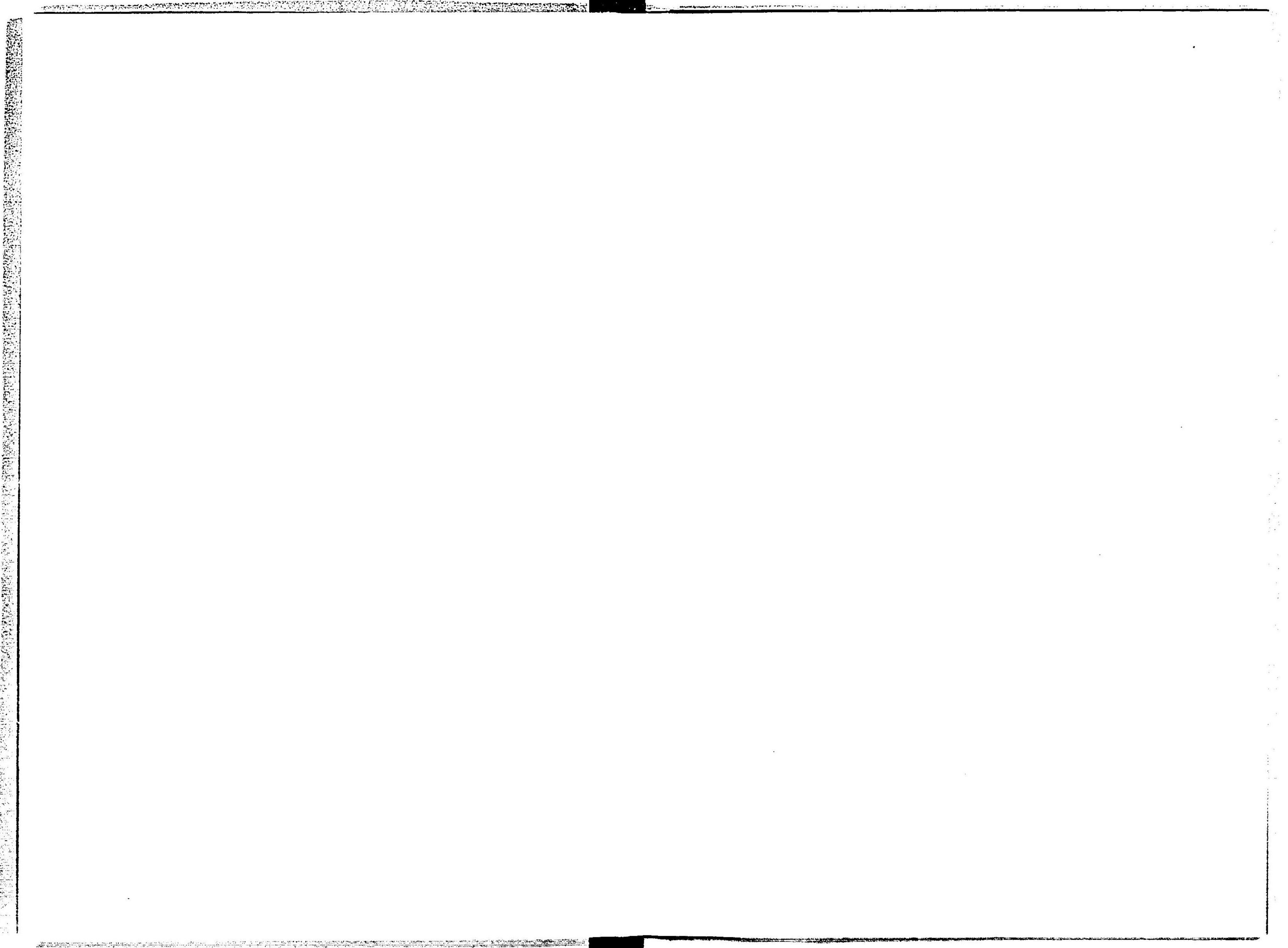
井上 円了 / 述

境野 哲 / 記

M32

ABA-0238





工. 7. 10

14

225

哲學館 第一學年度
宗教學科講義錄

比較宗教學

井上日了